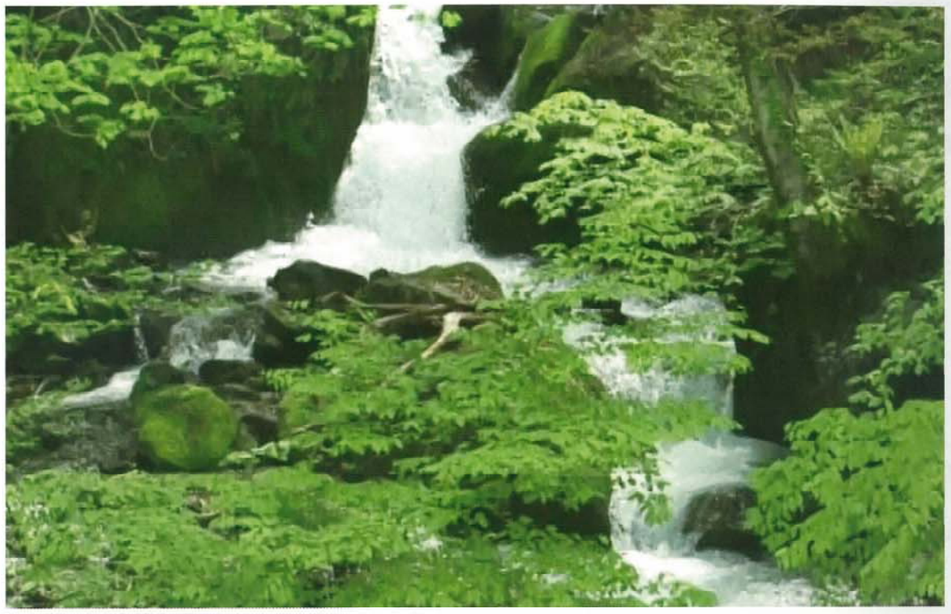


第21回 全国川サミット in 取手

発行　第２１回全国川サミット in 取手実行委員会
〒302-8585　茨城県取手市寺田 5139
取手市建設部水とみどりの課かわまちづくり推進室
ＴＥＬ：0297（74）2141　ＦＡＸ：0297（72）2682
E-mail：water-greenpark@city.toride.ibaraki.jp

第21回 全国川サミット in 取手

川とつながる私たち

～水・命・文化・そして夢と未来～

報　告　書

全国川サミット連絡協議会

目　次

Ⅰ　開催概要

１）全国川サミットとは …… １
①　参加自治体 …… １
②　全国川サミットのこれまでの開催地 …… ２

２）取手市開催の意義 …… ３

Ⅱ　実施内容

１）１０月１３日（土）－第１日目－
①　記念植樹式・記念撮影 …… ４
②　小貝川フェスティヴァル視察 …… ４
③　全国川サミット連絡協議会総会 …… ５
④　利根川・小貝川紹介ＤＶＤ上映 …… ６
⑤　首長サミット（国土交通省講演・首長意見交換） …… ７

２）１０月１４日（日）－第２日目－
①　開会行事 …… ２３
　オープニング（Spark the ☆ Dancers Kuga による踊り）
②　全国川サミット in 取手開会式 …… ２３
③　参加自治体紹介 …… ２４
④　記念講演　講師「さかなクン」 …… ４１
⑤　アトラクション …… ４１
　取手市立取手第一中学校による吹奏楽
⑥　児童生徒研究発表　取手市立取手第二中学校 …… ４２
　児童生徒研究発表　取手市立白山小学校 …… ４３
⑦　サミット宣言・サミット旗受渡式・次期開催地あいさつ …… ４４
⑧　展示等 …… ４６

Ⅲ　第２１回全国川サミット in 取手を振り返って …… ４７

Ⅰ　開催概要

1）　全国川サミットとは

一級河川と同じ名称または一級河川の流域にある全国の自治体が、「全国川サミット連絡協議会」を組織し、川がもたらす恵みや人々との関わりを活かしながら、川と共存するまちづくりを進めることを目的に、加盟自治体が持ち回りで開催しています。

平成４年富山県庄川町（現砺波市）で第１回サミットが開催され、今回で２１回目となりました。

①　参加自治体

《全国川サミット連絡協議会》

	岩手県二戸市
	秋田県横手市
	新潟県長岡市
	群馬県みなかみ町
	東京都江戸川区
信州・千曲川流域 川上村	長野県川上村
	岐阜県白川町
	岐阜県揖斐川町
	兵庫県加古川市
	茨城県取手市

《利根川・小貝川流域自治体》

	群馬県昭和村
	茨城県古河市

	茨城県守谷市
	茨城県常総市
	茨城県つくばみらい市
	茨城県牛久市
	茨城県龍ケ崎市
	茨城県河内町
	茨城県稲敷市
	茨城県潮来市
	千葉県我孫子市
	千葉県栄町
	千葉県神崎町
	千葉県香取市
	千葉県銚子市

②　全国川サミットのこれまでの開催地

回　数	開催地	テーマ
第１回	富山県庄川町	川は未来に夢はこぶ
第２回	北海道鵡川町	きらめきリバータウン ～川と人の未来を求めて～
第３回	静岡県大井川町	夢と希望あふれる川づくり ～川は命、未来の子供たちへ引き継ごう～
第４回	兵庫県加古川市	川は友だち ～ひと・まち・川　ちょっと素敵な物語～
第５回	徳島県那賀川町	未来へ語ろう！　私たち川家族
第６回	秋田県雄物川町	川がつなぐ「ひと・まち・こころ」
第７回	宮崎県北川町	思い出いっぱい　不思議がいっぱい ～川を彩るホタルの光が子供たちへの贈り物～
第８回	愛媛県肱川町	21 世紀へのメッセージ ～それは川から始まる～
第９回	三重県宮川村	川に愛される人になりたい ～ちょっと素敵な川家族～
第 10 回	兵庫県揖保川町	歴史に学び明日を見つめる川づくり ～ともに創ろう　川の未来　水の未来～
第 11 回	東京都江戸川区	暮らしにとけ込む、にぎわい川 ～都市の中の川を考える～
第 12 回	岡山県加茂川町	森と川が伝える　ふるさとからのメッセージ ～水は生命の源～
第 13 回	奈良県十津川村	みんなで考えよう！　河川環境
第 14 回	兵庫県猪名川町	清流とともに暮らす ～ええやん猪名川５０年～
第 15 回	岐阜県揖斐川町	川面に暮らし　川とともに生きる
第 16 回	東京都江戸川区	川の恵みとその脅威
第 17 回	群馬県みなかみ町	川を活かしたまちづくり・川と交流
第 18 回	秋田県横手市	川がはぐくむ「ひと・まち・こころ」 ～山と川のあるまちから～
第 19 回	兵庫県加古川市	川はともだち ～未来につなぐメッセージ～
第 20 回	新潟県長岡市	絆 ～川は流れ、地域をつなぐ～

２）　取手市開催の意義

平成４年から始まった全国川サミットは、平成２４年に２１回目を迎え、茨城県取手市で開催されることとなりました。

取手市は、茨城県の南端部に位置し、南を「坂東太郎」と呼ばれ親しまれた一級河川「利根川」、北から東をその支流の「小貝川」が流れています。江戸時代には高瀬舟が行きかい、江戸への舟運の要衝として栄えました。また、水戸街道の宿場町として、人・物資・文化の交流で賑わいを見せていました。

首都圏から約４０km、電車で約４０分という交通の利便性に恵まれた位置にあり、昭和４０年代からの高度経済成長期には、大規模住宅開発により人口が増加し、首都圏のベッドタウンとして発展してきました。昭和５７年には地下鉄千代田線が取手駅まで乗り入れ、茨城県の南の玄関口として交通の利便性がさらに向上しました。

平成になると東京藝術大学取手校地が開設、平成１１年に先端芸術表現科が新設されたことを契機に、市民・大学・行政が一体となって「アートを通じて人々が出会い語り合えるまちづくり」を進め、文化創造・発信の地となるような様々な事業を展開しています。

今回の全国川サミットは、「川とつながる私たち　～水・命・文化・そして夢と未来～」をテーマに、全国の自治体からの参加者と市民が、川と地域の関わりや川との共生について考え交流を深め、取手市内を流れる利根川・小貝川の恩恵を再認識し、連携を深めることを目的として開催しました。

←　１０月１４日
第２１回全国川サミットｉｎ取手
会場　取手市民会館

Ⅱ　実施内容

１）　１０月１３日（土）－第１日目－

①　記念植樹式・記念撮影

茨城県取手市内にある、小貝川の岡堰地先にて記念植樹式・記念撮影をおこないました。

記念植樹として６本の「シモクレンの木」を参加自治体の皆様と植樹致しました。

記念植樹式　→

←　記念撮影

②　小貝川フェスティヴァル視察

小貝川ふれあい広場で行われた小貝川フェスティヴァルの視察をしました。

５０ｍ往復をタイムトライアル方式で競う第５回小貝川Ｅボート大会、かつしかポニースクールのアクロバット・ライディングの演技を見学しました。

↑
小貝川フェスティヴァル
Ｅボート大会を視察

←　かつしかポニースクール
アクロバット・ライディングの演技

③　全国川サミット連絡協議会総会

取手市にあるグリーンパレスふじしろ「鳳凰の間」を会場に、参加自治体の代表者が出席し、全国川サミット連絡協議会総会が開催されました。

以下の報告事項及び協議事項について審議され、すべて満場一致で承認されました。

なお、今後の全国川サミット開催予定については、平成２５年度第２２回全国川サミットの長野県川上村開催が確認され、さらに平成２６年度第２３回全国川サミットを千葉県香取市で開催することが承認されました。

＜次第＞

会長挨拶　取手市長　藤井 信吾

来賓祝辞　国土交通省水管理・国土保全局河川環境課長　金尾 健司 氏
茨城県土木部長　小野寺 誠一 氏

来賓紹介　国土交通省水管理・国土保全局河川環境課長　金尾 健司 氏
国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所長　須見 徹太郎 氏
国土交通省関東地方整備局利根川下流河川事務所長　中村 徹立 氏
国土交通省関東地方整備局下館河川事務所副所長　新名 秀章 氏
茨城県土木部長　小野寺 誠一 氏

○　参加状況報告

○　議題

◇報告事項

・第１号　第２０回全国川サミット in 長岡　事業報告について
・第２号　第２０回全国川サミット in 長岡　収支決算について

◇協議事項

・第１号　第２１回全国川サミット in 取手　事業計画（案）について
・第２号　第２１回全国川サミット in 取手　予算（案）について
・第３号　第２１回全国川サミット in 取手　共同宣言（案）について
・第４号　今後の全国川サミット開催予定について

＜会長挨拶・来賓祝辞＞

茨城県取手市長　藤井 信吾

国土交通省水管理・国土保全局
河川環境課長　金尾 健司 氏

茨城県土木部長 小野寺 誠一 氏

総会の様子

④　利根川・小貝川紹介ＤＶＤ上映

利根川・小貝川の紹介ＤＶＤ「川の流れと共に　―私たちの街を流れる利根川・小貝川―」を総会会場にて上映しました。

⑤　首長サミット

＜国土交通省講演＞
国土交通省　水管理・国土保全局
河川環境課長　金尾 健司 氏

国土交通省水管理・国土保全局河川環境課長 金尾 健司 氏から「最近の川をめぐる話題」について報告をいただきました。

それでは少々お時間をいただきまして最近の河川行政をめぐります話題をいくつかご紹介させていただきます。

まず最近の災害の状況について、簡単にご紹介を申し上げます。

まず渇水の状況でございます。今年、利根川は久方ぶりに渇水ということでございました。４月から９月まで貯水量がどんどん減ってまいりまして９月１９日で前年に比べまして貯水率が３７％まで落ちました。貯水量が１億２，６００万トンちょっとですが、１億トンを切りますとかなり厳しい状況になります。心配はしていたのですけれど、幸いにも台風のシーズンになりまして、今は貯水率がかなり回復いたしまして９月１１日から１０月３日まで１０％の取水制限をお願いしたということでございます。利根川流域の渇水の現状でございました。

それでは洪水の方もお話させていただきたいと思います。

北部九州で７月に大きな雨が降りました。特に大分県の山国川、ここは耶馬渓のところです。それから矢部川、これは柳川市でございます。それから熊本の街中を流れます白川、それぞれ最高の水位を観測しまして氾濫がございました。福岡県の黒木というところでございますが、雨量の状況で１時間に９４ミリ、９時間に３６５ミリという異常な豪雨でございました。結果、国が管理しています矢部川という川でございますけれども、堤防が破堤をいたしました。福岡県が管理する川もいくつか破堤をしまして大きな災害になりました。高い水位が４時間も続いたということで堤防を乗り越えて破堤したのではなかったのですけれども、長い時間高い水位にあった状況でございます。矢部川の破堤では、約５０メートルの堤防の決壊がございまして６４時間で何とか応急復旧したという状況でございます。

それから平成２３年度も大きな被害がございました。一つは新潟・福島豪雨、それから台風１２号、それも大きな災害をもたらしたわけであります。大きな被害が出ましたのは阿賀野川です。上流が只見川という川でございますけれども、阿賀野川で大きな被害が出ましたし、信濃川の支流に五十嵐川という支川がございますけれどもその辺りでも破堤の被害が出ました。実は、信濃川の下流の長岡の少し近くになりますけれども五十嵐川、刈谷田川が、平成１６年にも大きな出水を経験してまして、平成１６年は、刈谷田川と五十嵐川が破堤をいたしまして被害が出ました。その時の浸水家屋が９，７７８戸、それから浸水面積が２，４７３ｈａということで、この災害を受けまして集中的に河川改修を行いました。今年、新潟・福島豪雨を経験した訳なのですが、雨の量は平成１６年に比べますと６４７ミリに対しまして１，００６ミリ、１．６倍の雨が降りましたけれども河川改修

を行いましたので浸水家屋は約９割の減、それから浸水面積は約８割の減ということで大きな効果を得たということでございます。

それから、昨年の台風１２号の被害ですが紀伊半島を中心に大きな被害がでました。河川の氾濫もございましたし、何といっても土砂災害です。河道閉塞がおきまして山が崩れて川を塞ぎまして天然のダムが決壊すると大変な被害を起こします。台風１２号の時の活動ですが、お聞きおきの方もいらっしゃると思いますが、ＴＥＣ－ＦＯＲＣＥです。地方整備局の職員で、普段は通常の業務をしておりますが、いざ災害がありますと、ＴＥＣ－ＦＯＲＣＥ隊員としまして災害対応をしている状況です。各地方整備局でいくつかございますけれども、延べ５，１８５人の人間が活動いたしました。ヘリコプターで広域から被害状況を調査いたしました。紀伊半島は山深いところでございまして道路が寸断されてなかなか被害の状況がわからない時に、ヘリコプターで上空から被害の状況の調査をしました。なんといっても河道閉塞、それと最近テレビでよく聞く深層崩壊でダムができてしまいまして決壊する恐れがあるということで対応をいたしました。申し上げましたＴＥＣ－ＦＯＲＣＥの制度は平成２０年度に創設され、様々な災害に応じているということでございます。活動の内容は被害状況を調査したり、あるいは災害の緊急対応をする、地方自治体へ色々な支援をするという活動をＴＥＣ－ＦＯＲＣＥ隊員が行っております。各地方整備局合わせまして全国で３，９３０名がＴＥＣ－ＦＯＲＣＥ隊員として、さまざまな災害用対策機材を持っております。各地からの要請に応じましてこれを持って現地に赴くということです。関東地方整備局でも１，００１名がＴＥＣ－ＦＯＲＣＥ隊員として登録されています。災害対策用の機材で、最近よく活躍するのは排水ポンプ車で、全国で３４３台のポンプ車を所持しております。東日本大震災の時も仙台空港の周辺も浸水を受けましたので、その時の排水対応も排水ポンプ車が行いました。また照明車というのも持っておりまして夜間対応の時に使用します。災害時に通信が途絶えてしまうので衛星通信車もあります。Ku－ＳＡＴは可搬式の衛星通信の装置です。特に２３年は災害が多く出ましたので延べ２３，６４８人のＴＥＣ－ＦＯＲＣＥの派遣がありました。東日本大震災ですが延べ１８，１１５人の隊員を派遣させていただきました。

ここから、河川環境とかわとまちづくりなどをご紹介させていただきたいと思います。

かつての原風景ということで人と川の関わりを古い写真をご覧いただきます。琵琶湖から流れ出ます瀬田川の昭和２０年代の川で洗濯をしている様子です。九州の川内川で、子供たちが川の中で遊んでいます。昭和３５年の兵庫県のコウノトリで有名な豊岡市の出石川の風景です。昔は川と人が非常につながり、密接であったという風景です。高度経済成長期、川はどうなりましたかというと、昭和３６年当時の隅田川は大変匂いがひどくて鼻を押さえています。それから昭和４５年頃の多摩川は、家庭排水からの洗剤の泡で川の水が泡立っている状態です。また、川も洪水を流すという効率性だけを追求してコンクリート張りの排水路のような川で、東京の神田川の写真です。渋谷川という川でございますが、以前は河骨川という川で春の小川のモデルになった川ですけれども、今はコンクリート張りの渋谷川になっています。

川をどう取り戻していこうかということで河川環境施策を作ってまいりました。高度経済成長時代、水質の悪化ということで公害問題になりました。昭和３０年代から川の浄化をしようということで昭和３３年、初めて浄化対策ということで隅田川の水質の浄化を始めました。その後４０年代になりますと河川敷の利用を進めていこうというようなことで、オープンスペースの確保として、様々な河川整備を進めてまいりました。昭和６０年代に

入りますとまちづくりの気運の中で川をいかに取り込んでいくか様々なモデル事業で対応してきました。平成に入りますと今度は生態系の重視ということで、平成２年に多自然型川づくりの方向に転換をしまして、その後河川法の改正がありました。

河川法の改正ですけれども近代河川制度として古い河川法が出来たのは明治２９年、その後昭和３９年改正いたしました。背景が高度経済成長期、水利用に対応する改正がありました。平成９年には河川管理の目的の中に環境を明示しまして、こういう改正を行ってきた訳ですけれども、具体的な対策をいくつかご紹介します。水質浄化の取組ですが、霞ヶ浦の底泥の浚渫、河川を直接取り込みましてこれを浄化しようというものなどです。湖岸の植生をよみがえらせて浄化するということもやっております。一例といたしまして、島根県の松江の例です。松江城のお堀の松江堀川なのですけれども浄化対策をする前は、大変汚れていましたが、導水を行いました結果、水質の調査をいたしましたらＢＯＤが３．２と水質が改善いたしました。それから水辺利用の例でございますけれども、河川敷はこれまで原則として収益をともなうような利用は認めてこなかった訳なのですけれども、公平性とか透明性とかそういうものを確保したうえで収益事業を認めていこうではないかという特例で太田川の川沿いに民間のオープンカフェを設置して大変賑わっております。年間４万人位の利用があります。それから子供たちに河川での自然体験活動ということで、特に川というのはいい素材だという事で水辺と触れあっていただこうと思っております。

それから、かわまちづくり支援制度も最近やっております。自治体の方で川をよくして地域づくりに活かしていこうと計画を作っていただきまして水管理・国土保全局に登録をしていただいてさまざまなハード支援をしていこうかと思っておりまして、現在、全国で１００を超えるようなかわまちづくりの登録がございます。これも皆様と一緒に進めていきたいと考えております。

自然の豊かな川づくりを進めていこうかということで、横浜の市内の川なのですけれども洪水対策でコンクリートで固めた川を景観に配慮したり、あるいは水際の自然をもう一度戻していこうとしています。釧路川で蛇行した川をまっすぐに付け替えたということですけれども、それをもう一度自然に戻すという事業をしております。渡良瀬遊水地もこの近くにございますけれども、この遊水地の主目的は治水対策の施設ですが、貴重な自然が残っている場所です。今年、ラムサール条約にも登録されました。自然再生していこうという計画では、魚道やワンドの整備も進めています。

最後になりますがネットワークということで関東ではいくつかの自治体が生態系のつながりをつくる取り組みを始めている所でございます。以上でございます。

＜首長意見交換＞

参加自治体の代表者から、「川を活かしたまちづくり」などについて意見交換が行われました。

主な内容は以下のとおりです。

☆　茨城県取手市　藤井 信吾 市長

総会の冒頭で申し上げました、かわまちづくりとして、利根川東遷後の川の流れの中の立体感の交流という事で、利根川舟運・地域づくり協議会というものを発足しました。利根川下流河川事務所のご協力によりまして、平成２０年利根川下流域１８市町村で利根川舟運・地域づくり協議会を設立した訳でございます。最初の２年間は国の地方の元気再生事業の方から一定の支援を頂きまして舟運連携リレーイベントや河川空間を活かしたイベントなどの社会実験を行いました。そしてまた、霞ヶ浦の流域の皆様方にも声をかけて利根川・霞ヶ浦の舟運の可能性について検証しました。ラクスマリーナという会社が所有する霞ヶ浦を航行する２階建ての船を取手の方まで来て、乗っていただいたりとかそんな形で検証しております。２２年度以降、地方の元気再生事業の支援が無くなったので、各市町村の舟運交流の経費や建設弘済会の助成金などによりまして引き続き利根川舟運による地域の活性化事業を行っております。毎年約２０を超える交流事業や河川敷等を活用したイベントを計画しまして多くの皆様が参加をされているという事でございます。特に取手市からの市民の参加が非常に多くて、各市町村との交流事業は毎回定員オーバーとなって競争率が高いとのご愛顧をいただいております。この期間に国土交通省におきまして利根川の下流域に５つの船着場を、我孫子、成田、神崎、東庄、銚子に新設していただきました。この船着場を活用して協議会の交流事業や民間の舟運事業者の利用者のツアーが実施されているところでございます。

また、取手としては、小さい堀と書いて「おおほり」の渡しと呼ぶのですが、以前は利根川の対岸にありました小堀地区の住民の通勤・通学のための渡しでしたけれども、現在は小堀の船着場、緑地公園の駐車場の船着場、常磐線鉄橋下のふれあい桟橋の３点を周遊する形の観光舟運事業として一日７便を取手市が運航しております。今年度からは市の職員が渡しに乗って２時間で案内するというようなミニツアーも実施してございます。

こんな形でせっかく地元にあります資源でございますので活用させていただいているという事でございます。

☆ **新潟県長岡市　磯田 達伸 副市長**

昨年はサミットをやらせていただきまして多くの皆様に長岡の花火大会を見ていただきまして本当にありがとうございました。

先程、国土交通省の河川環境課長さんのご講演で災害の話がございました。平成１６年７月１３日刈谷田川の決壊というのがございました。私どもの合併した中ノ島地区で死者も出たという大変な事態になりました。その後、去年の新潟・福島豪雨で７月３０日、下流の三条地区では五十嵐川の決壊というのもございまして最近はやはり雨の降り方がちょっと変わった感じがします。例えば７月３０日に豪雨がありまして、８月１０日からお盆にかけて信濃川の様子を見ると依然としてずっと濁ったまま、どうしてこんな風に１週間２週間と経つのに水が濁っているのかと地元で結構話題になりました。色々な説がありますが山の様子が変わってきたという事で非常に一気に水が出て、７月３０日の時も、私ども地元の塩谷川という所が大変な局所的な大雨になって本当に根こそぎやられて、結局、復旧事業が総額１００億円以上というような事でした。今まさしくやっていただいておりますが、以前では想定してございませんので、結局、信濃川本川のまず水位を下げていただかないとなかなかこれからの対応が出来ないのではないのかと話も出ております。長岡の市民２８万人ですけれども一番市街地の一番真ん中を通る部分が、だいたい川幅が１キロ以上になっていて本当に海のような川が目の前に広がって、非常に市民としては不安な思いをしました。そういう意味では今回のサミットのテーマとは若干ずれますが防災の件からは気候の面を含めて中山間地の状況も含め新しい段階に入ったのかという感じがしております。

あと、川を活かしたまちづくりの観点からは、今年の長岡祭り大花火を８月２日３日に開催したのですけれども約９０万人のお客さんがおいでになりました。来年、再来年は土曜日・日曜日にかかりますので１００万人の目標を突破するだろうという事で国土交通省の河川事務所の方にお願いしながら観客席を広げるような対策をするという事を考えていただいております。ここ数年来、信濃川の堤防は高いのですが、緩やかにしていただきまして本当に素晴らしい河川環境になりました。関東では普通かもわかりませんが多くの方がそこを行き来できる親水空間とする取り組みをやっていただいたおかげでどんどん進んでおります。年間１００万人目標の佐渡観光というのが現在６０万７０万というようなオーダーですので、２日間で１００万人来ていただけるというのは本当に長岡市の周辺の新潟県全体にとっても大変ありがたい環境をいただいているという風に思っております。

元々、人の交流は道であった、でも、物の交流は川であったという事でございますので、川を通じた連携というのは、本当に私どもに大事に思っておりますので関係の市区町村の皆さんと国のご協力を得ながら連携の発展を頑張っていきたいと思っているところでございます。

☆ **兵庫県加古川市　樽本 庄一 市長**

今日参加の皆様の中では一番西にありまして関西圏は私の都市だけだと思います。

昨年、長岡市の日本一の花火と言うより世界一の花火を見学させていただきまして、私どもも今年は頑張りまして５，０００発の花火をあげさせてもらいました。少ないという事かもわからないのですが、当県では皆様ご存じのとおり明石で大きな花火大会の死亡事故もございまして、現在も裁判がおこなわれているのですが、そういう事故もありましたので自粛をしているわけです。そんな中、私どもも頑張ってあげようという事で頑張ってあげました。

そしてもう一つ、ここは意見交換ですので川サミットと少し離れるかもしれませんが、川の親水事業で潤いとやすらぎをもたらすという前にやはり先程も言いましたように安全安心な川でないといけないと思います。

その中で今、市長会の中でも、この間国土交通省の中央機関のお話があったと思います。利根川の関東圏の方はどうか分らないのですけれども関西広域連合は私どもの知事が関西の広域連合の連合長でございまして先日も近隣市長会、それから町村会と説明会もありました。市長会の中でも色々な議論があるのですが、川を安全安心の部分から見て、安全安心というのは余り考えられずに親水機能の要求と言うのがありまして、安心安全の議論がうまくいかないというのが、私どもの中でおきているというのが今、関西の実情でございます。また、意見の中で関東での、そう言う話も聞かせていただければありがたいなという風に思っております。

☆ **秋田県横手市　佐々木 隆 建設部次長**

横手市は過去２回開催しておりますが、最近では第１８回全国川サミットを雄物川河川敷で開催しております。

雄物川は秋田県の南部を流れておりまして全長が１３３キロ、それから流域面積が４７１０㎢というような小さい川ではありますが、今回災害の話も出ておりますが７月から８月にかけて約２ケ月間殆ど雨が降らない状況が続いておりました。市内に３つのダムがございますが、この３つのダムのほとんどが、まだ水を備えていない状況でございます。これから冬にかけてどういう風な事が起きるのか大変懸念されるところではありますが幸いにも飲料水の部分につきましては確保しているという事です。

それから横手市はかまくらの街でありまして、そもそもかまくらは水神様が作った、それこそ昔から水の発展を守ってきたそういう横手市の事業です。また、雄物川についてはお米の名前でご存じのとおりあきたこまちの生産地の水域でございましてそれこそ市内では大変中心的銘柄を生産しております。それから市内では酒蔵が５つございます。最近の状況といたしまして、春先から局地的な集中豪雨がございます。それから今、長岡市さんからもありましたが過去経験したことのない大変な状況というような感じがしております。

そのような状況を踏まえ雄物川の上流に現在ダムを計画しておりますが、なかなか検証作業でダムがまだまだ出来る段階にいたっている訳ではございません。改めてこの水の大切さというのはひしひしと感じている状況でございます。この秋、この雨の降らない状況で秋の農作物のりんごが小さい、秋の農産物の出来が非常に悪いという状況で改めて水の大切さを今考えているところでございます。それから川を活かしたまちづくりという観点から言えば国土交通省さんがおいでいただきましたが、全国線香花火大会も行います。ぜひ、皆さん、お時間がありましたら横手市においでいただきたいと思います。

☆ 群馬県みなかみ町　鬼頭 春二 副町長

川を活かしたまちづくりの事例を紹介させていただきたいと思います。

みなかみ町は利根川を活用しまして日本リバーベンチャー選手権大会を開催させていただいております。清流から激流まであらゆる川をゴムボートで下るアウトドアスポーツ　ラフティングが今や町の重要な観光資源の一つとなっております。昭和５１年から始まり今年で３６回を数える歴史ある大会となっております。第１回大会ではわずか５０の参加でしたが、現在では国内の大会の中でも最大規模の参加者数を誇るまでになっています。毎年５月に開催され前夜祭も行われ地域住民と交流も図られております。

もう一つの取り組みとして赤谷湖Ｅボート大会がございます。今年６月に利根川の支流赤谷川の源流である赤谷湖で開催致しました。今年初めての開催でしたが友好都市でもあります取手市からのチームも参加いただき、町内からも１００名を超える皆様にご参加いただきました。この大会をきっかけに、上下流域の交流をさらに深めることが出来るよう、来年も開催する予定でございます。

町では利根川を含め谷川岳の大自然があります。その大自然を活かしたアウトドアスポーツを誰もが安全に楽しんでいただくために町ではこの９月、町議会におきましてアウトドアスポース振興条例を作成いたしました。アウトドアスポーツ事業者に安全基準の講師を含め高い安全性を確保するとともに自然環境に配慮した質の高いアウトドアスポーツの提供に繋げて地域の活性化を図っていきたいと考えております。

☆ 東京都江戸川区　高井 聖 土木部参事

先程、岡堰の方をご案内いただきましたが、川を活かしたまちづくりという事で、そういう意味では岡堰と言うのは逆に言うと川を活かしたまちづくりの最たるものかなと思います。３万石、２万石の舟運があったという事は、１年間に人間が３万人２万人働いたということで大変な事だなと思います。そういった先人の努力、治水・利水、様々な事でございますけれどもそういったものがあって我々は今生きていられるという事を忘れてはならないのだなと思っております。江戸川区は河口に位置をしておりまして過去、荒川も真ん中を流れる新中川も開削をして作られた川でございます。様々な水害の脅威から地域を守るために先人たちが相当苦労してという所に今生かされて川が活かされて、現在潤いのある環境が作り上げられてきているという事になります。区域の２割が河川区域となっておりますので６８万の区民が憩いの場として貴重な空間という風になっていまして様々な部分に活用されておりまして、サイクリングロードであるとか様々なものに使われております。かつてはどぶ川であったところも活用して親水公園であったりとか、それから歩道を作ったり緑化事業に対して非常に街の中も潤いが出来てきております。当時はどぶ川であったものですからどぶ川に背を向けて人は暮らしていたのですけれども、奇麗にした事によって逆に川に面して人が住みだしてというふうに環境が変わってきました。それから野鳥等も戻ってまいりまして非常に生態系も戻って来ております。昔は川を怖いもの、どぶ川に背を向けた暮しから、今は憩いの場になってきているという事でございまして、現在江戸川区が取り組んでいる究極の川を活かしたまちづくりと言うのは、スーパー堤防という事業でございます。川の脅威から逃れる事は出来ませんので、こういったまちづくりについては区をあげてしっかり取り組んでいきたいと決意をしているところです。

☆ 岐阜県白川町　鈴木 寿一 参事兼経営管理課長

私の町は、岐阜県の東部に位置している正三角形の小さな町でありますが、一応水源の郷という事で特に上流は水質浄化に心掛けて事業をおこなっております。また、イベントでは今年の８月２５日にＥボート大会を行ったわけでございますが、私どもの町は２つの河川がございましてその中の河川で飛騨川という河川がございますがそれが隣の市へいって木曽川に合流して伊勢湾にそそいでいます。木曽川と飛騨川の流域の交流という事で飛騨木曽Ｅボート交流会という事で今年は白川町にてＥボート大会を行ったわけでございますが流域の１５の市町村から４５のチームが参加して頂きまして、今日見せて頂いたような交流大会で白熱したレース展開を行っていただいて上下間交流を行ったという事であります。

また、白川町の中には白川という川がございまして、私たちの町と中津川市・東白川村の３市町村を流れておりますので、その３市町村の流域連絡協議会というようなものを立

ち上げまして、川に関する事業あるいは山に関する事業、人に関する事業という事で、連携していけるものについては色々な取り組みを行っております。

また、先程災害について話がございましたが私の町も昨年の９・２０豪雨という事で、大きな災害がございました。河川あるいは道路を始めとして大きな被害が発生いたしまして、１年かかってもまだ完全に復旧しないという事で今も復旧作業が続いておるというような事でございます。

また、川とは関係はございませんが水源の郷として色々な取組みをおこなっておりまして当町の場合は、過疎化・高齢化と大きな課題もあるわけでございまして、全国水源の郷連絡協議会といったものも作りまして来月の２日、３日と白川町でイベントと水源の郷サミットを行う事を計画しておるところでございます。また、興味のある方はお越しいただければありがたいと思っております。

☆ 岐阜県揖斐川町　窪田 直樹 産業建設部長

私の町には一級河川揖斐川が流れていまして、その最上流部には総貯水量日本一を誇る徳山ダムがございます。そういう中で今年９月２８日から１０月８日まで岐阜県におきまして第６７回の国民体育大会の開催がありまして、私どもの町ではカヌー競技を開催しました。このカヌー競技につきましては河川を１，５００メートル一気に漕ぎ下ってタイムを競うワイルドボートという競技とゲートを川面に設置して行うスラロームという競技が開催されました。中腹点にカラーポール等を設置しなければならないという事で４年ほど前から国土交通省さんと協議いたしまして色々協議しながら昨年ようやくコースが完成しました。そして、国体のリハーサル大会という事で予選大会を２日間開催しましたところ、ちょうど渇水期ということもぶつかりまして水位が下がりましてボートの底をそるという選手からの指摘がございました。ちょうど１日目、土曜日でございましたけれども急きょ河川事務所さんにお願いしまして徳山ダムの放水量を増やしていただきまして大会を無事終了する事が出来ました。そして、先月から今月にかけまして本番を迎えたわけでございますけれども、今度は台風１７号にまともにあたりまして大雨で増水しまして競技が開催出来ないということで、今度は、国土交通省さんにお願いしまして徳山ダムの放水量を８時間控えていただきましてカヌー競技を行う事が出来ました。国土交通省さん河川事務所さんと水資源機構さんのご協力もあって大変感謝いたしております。

☆ 茨城県取手市　藤井 信吾 市長

加古川市の樽本市長さんから、防災についての河川のお話がありましたが、時間にも限りがありますが、いろいろ防災などの共有できるテーマでコメントして頂ければと思います。

☆ 群馬県昭和村　堤 盛吉 村長

群馬県昭和村でございます。利根川の上流にある村でございますけれども、防災・災害対策につきましては、やはり川は繋がっている、その中で国土交通省もそうですけれども、自治体は連携をして河川の治水をしていけたら災害なく上下間交流ができると思っております。

☆ 長野県川上村　藤原 忠彦 村長

今、国は土建促進という事で論議を行っております。多分、防災は河川連合を含めてあんまり積極的には動いていないと思います。町村は非常に今心配をしております。今回のこの国会で法案を出したいという話があります。昨年の３．１１東日本大震災、そして長岡市周辺の大洪水、九州の昨年、今年と大変な大災害がございまして現地の機関が相当頑張っていたわけでございます。そういう中で一挙に分権でそれぞれの所で分散されていて非常に心配している訳でして、私も今、全国の町村会長をおおせつかっておりまして大変この問題について真剣に考えておりますし、今、内閣の方から呼び出しを受けております。そんな事で色々な各県の町村会長さんとも相談しながらしておりますが、全く受け手の内容が分かっていないという事と、それから各県の状況も全く分かっておりません。ですから余り早急にこの問題を進める事はあってはならないのではないかと意見を持っておりまして、もう少し時間をかけて議論をしてそして全て納得した中では、それも仕方ないと思いますが、今の段階で是非を問うというのは非常に困るという意見が相当あります。是非それぞれの各地域で真剣に論議していただきまして、本当に日本の国土が安全で住民の皆様が安心して暮らせるようなそんな公共政策が出来るような政策を取っていただきたいと思いますので、是非もう一度真剣に考えていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

☆ 茨城県潮来市　松田 千春 市長

♪潮来花嫁さんは船で行く～♪というのがありますけれども文字通り潮来花嫁さんは船で行く。馬車で行くわけでも無くて、人力車でも無いと言う本当に、お隣香取市と利根川を間に挟んだ本当の意味でも水郷地帯という中で、水を抜いては考えられないような街でした。そういう意味では水イコール災害・水害という大変な思いをしたのが潮来市の歴史でもありました。そういう中では潮来市には前川のあやめ園というのがございまして大変に大きいあやめ祭りをやるところなのですけれども、この前川というのは突如としてやはり反乱をおこすという事がございました。それを２年前、国交省の力を得ましてここに調整排水を作らせていただきました。そういう中で潮来市が水没することは無くなったという事でございます。そういう中でただただ調整的なポンプを設置してという事、今までの河川環境の考え方というのはダムなり河口堰、排水機場だとか、国交省の建物管理者は国なのだという事でなかなか一般の方を寄せ付けることはなかったと思います。そこを柔軟な運用ということを念頭においていただきましてその施設を観光技術というような形に変えさせていただき、これが排水機場というようなことは皆目見当がつかない形に仕上げをさせていただきました。一つの大きい観光の要となっております。そういうようなやはりまちづくりにも安全性を高めていく一つの共存、共演、これからの防災の中でもやはり防災の意識を高めていただくというような中でも、子供たちを通じて教育をする場所でもあるという事でおおいに国交省さんには今後もそう言った政策を努めていただければありがたいと思います。多くの川サミット参加の自治体の皆さんもこれから色々なことを考えていく中でもそう言ったプラスαで国交省にご相談いただければ必ずいい案を出していただけるのかなと思います。本当にそういった面でもやはり川サミットで色々なプランを練っていきたいと思いますので、今後とも皆さんにはご協力していただけるようお願いいたします。

☆ 茨城県古河市　白戸 仲久 市長

取手市は茨城県の一番南の端なので、東京都・千葉県に一番近いところ。そして私どもは西の一番端でございまして埼玉県・栃木県という所に面しておりまして渡良瀬川があり、そこに三国橋というのがございまして、それがまさしく埼玉県・栃木県・茨城県３つの県の結節点で関東のど真ん中のへそにあたる市でございます。

今日の川を活かしたまちづくりという事については、どの程度関係しているか解りませんが、私どもの街も坂東太郎利根川に接しております。そして利根川の支流であります渡良瀬川、さらにその支流の思川が流れておりまして大変川には威厳がありまして色々な河岸があり舟運が盛んでありました。今日、この川サミットに参加をいたしまして更に川を通して活かしていこうという事を本当に真剣に考えますと、私どももそれだけ川に接しているわけでありまして、先程も河川環境課長さんからもお話がありました渡良瀬遊水地と言うのが一つございまして３３万ｋ㎡の中にゴルフ場があります。そのゴルフ場が、合併をしまして８年がたちますけれども合併して３市の融和を図ることで花火大会が始まりました。今日、長岡さんもおいでになりますけれども実は非常に花火をあげるロケーションとして安全教育協議会に注目されていまして３尺玉３発そして２万５千発をあげています。東京まで６０キロの首都圏では三尺玉と２万５千発の花火が出来るという事は、渡良瀬遊水地は非常に活用出来ているのだなと思います。本日は、そんな事例紹介をさせていただきました。

☆ 茨城県牛久市　池邉 勝幸 市長

利根川と合流する小貝川があってその前の小貝川に沿って牛久沼というのがございます。これはお隣の龍ケ崎市さんで名前が牛久、牛久沼という事になります。ベッドタウンという中で、最近の集中豪雨が激しくございまして、今までの設備ではだいぶ浸水被害が出ている状況であります。牛久沼というのが農業用水としての機能がなくなっていまして、水位が非常に調節できない状況です。川があっても流れない川というのは河川改修しながらも田んぼを借りてそこをご理解頂いて緑地整備と調整機能をもたせた親水公園として位置づけをしています。水の流れを緩やかにした調整機能を親水公園でもたせて、そして住宅の団地の公園整備というシステムを踏まえて、そして水害の対策をしようと今やっているところでございます。大きい川ではございませんが、最近１時間に８０ミリを超える短時間での集中豪雨に耐えるまちを作ろうという事で、調整機能を７ケ所について手をつけ始めているところでございます。雨水対策としての一環の整備で、皆様のような大きい河川の川を活かしたまちづくりとはちょっと違いますけれども皆様方のまちづくりを参考にこれからも頑張ってまいりたいと考えております。

☆ **茨城県龍ケ崎市　中山 一生 市長**

龍ケ崎市は、利根川の舟運によって江戸時代から商都と呼ばれるようなまちでございました。ただ一方では水害の歴史も長く、昭和５６年の水害はこの小貝川の左岸が決壊することによっておきた水害です。この大きな大水害、実は小貝川そのものでの雨量が少なかったにもかかわらず利根川上流の雨量が多くて逆流してそれに耐えられず決壊したというそういう水害でございました。私の祖父が良く言っていたのですけれども小貝川は利根川の支流だという表現をしていました。そういう意味で明治・大正・昭和と水害の歴史を繰り返したところでもございます。また、やはりそう言う意味では歴史的・文化的にも川・河川とは切っても切れない歴史のまちでもあったのだなと考えております。今お話しましたように水害でも大変大きな被害を受けましたが、水田の水として利用しておりまして龍ケ崎と利根町・お隣の河内町の大水田地帯の水源となっています。また、プライベートなことで申し訳ないのですれども、私の父は古橋広之進という水泳の有名な方と同窓でございまして水泳人として一生水泳の人で亡くなったのですが、その父の話を聞くと昔は子供たちを連れて小貝川や牛久沼で泳いで教えていたのだという話がございましたが、はるかそのようなことからは遠ざかってしまいました。河川・湖沼が水質の問題もありましてそう言う意味では親水という文字から少しかい離してしまっていると思います。牛久沼に関しても大変風光明媚な沼なのですが、それも水質の問題もありましてまだまだ活かし切れていないという事でございます。牛久沼の周辺としては牛久市・つくばみらい市・取手市とございますけれども、やはり周辺の自治体と周辺地域と協力しながら水質その他も含めてもっと住民の親しめる水環境・水辺環境を作っていかなければならないと考えておりますので、周辺自治体とも協議をしながらこの水環境について皆様のご指導を頂きながら今後も、もっと住民の親しめる水環境を提示してまいりたいと思いますのでご指導をよろしくお願いいたします。

☆ **千葉県我孫子市　星野 順一郎 市長**

我孫子といえば北側には利根川が流れて、南側には手賀沼があるというような状況でございまして水と緑と切り離せないまちでございまして、その上、水辺空間だけでなく、いざという時には水害の脅威にもさらされるという街でございます。治水対策でいえば、南側にあります手賀沼で排水が出来なくなるかという瀬戸際を担っているのが北千葉の排水機場だという認識をしております。その中で随分と手賀沼での水害は起こっていないことは感謝する次第でございます。また、利根川側について言えば、田中の調整池では非常に水害が多く発生します。この辺ではゲリラ豪雨が起こって、一時間あたりに、８０ミリあるいは１０４ミリその時にやはり床上浸水が出るという状況の中で樋管管理をして頂いているところですが樋管については能力が低いだろうという事で、国交省さんとも協議をさせて頂いている所でございます。これについては順調に用地買収を含めて改修

に向けて努力をしている最中でありますのでもうしばらくしたら本格的な改修についてご協力させていただこうかと思っておりますので、是非その節はよろしくお願い申し上げる次第でございます。非常時の場合を除けば、やはりこの水辺空間というのは非常に市民の皆様の憩いの場と言いましょうか、そしてまた賑わいづくりにも非常に価値のある場所という風に思っておりますし、健康づくりにも、そしてまた水との親しみをもたせていただくにも非常に水辺空間、川の周辺、沼の周辺というのは活用していきたい場所でございます。我孫子市においては、利根川のゆうゆう公園という形で多くの市民だけでなく他市からも来ていただけるようなスポーツもできるし、野外の活動もできるしという事で、十分な活用をさせていただいております。また、船着場も建設していただいて取手市さんとか、香取市さんの方にも行けるように船着場は整備されたのですが、残念ながら昨年の震災の時に船着場の周辺が少し痛んでそのままでございます。この辺についても船着場を再度活用していこうとするとこの辺の再整備が必要になってまいりますので、これについてもご協力いただけると利根川下流地域での舟運の事業が我孫子市からでも利用できるようになってきますので是非ともよろしくお願い出来ればというように思っておるところでございます。また、ゆうゆう公園については野球をやって、あるいはサッカーをやって非常に活用できるのですが、今日行った藤代スポーツ公園にいたっては、河川敷であっても少し木々があり木陰があって非常にいいなという風に感じたところであります。残念ながらゆうゆう公園の所は木が殆ど無いので、中低木を植えて木陰が確保できるのかどうかというのもご協議いただけるとありがたいなという風に今日感じた事でありました。ただ南側の手賀沼側についてですが手賀沼側については、今、我孫子市と印西市と柏市３市で手賀沼・手賀川活用推進協議会というのを昨年１１月に立ち上げまして、そこに千葉県とまた下流事務所さんにもご参加いただいて手賀沼・手賀川の周辺をいかにもっと魅力にある場所にできるか、また、水辺空間またはその周辺の地域を含めていかに活用できるかという事を具体的に協議をして進めている所でございます。今日は、京橋川のオープンカフェに非常に興味をひかせていただきました。私どもは手賀沼の周辺で国交省さんが持っている所、そして県が持っているところをなるべく有効活用させて頂いて自治体と民間とでオープンカフェ、あるいはスポーツが出来るような場所、色々な形で活用できるかどうか、そして占用の許可をしていただいてもっと活用していきたいなと思っていたところでありますので、今おる自治体とＮＰＯ法人、あるいは民間企業とあわせて協議している最中でありますのでなるべく手賀沼周辺にも同じように占用許可が下りて自由に入れるような場を作っていただければありがたいなという風に思ったところでございます。これからも色々な形で国交省さんにもご協力、ご理解いただければ我孫子市の南北にあります手賀沼と利根川を有効活用させていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

☆ 茨城県常総市　高杉 徹 市長

まず始めに川をまちづくりにどのように現在、活かしているかという事を説明したいと思いますが、このパンフレットに載っているように２つの写真があります。一つは花火ですね。鬼怒川の河川敷を利用して毎年８月に花火大会をしております。お陰様で常総市の花火、全国ベスト１０に入る位の素晴らしい花火という事で紹介されております。それからそのお隣の写真ですが、これは小貝川の蛇行部分を活用した釣り堀として、吉野公園と言うのが今作られております。ここは非常に川を活かした釣り堀という事で近隣市町村から多くの方に来ていただいてヘラブナ釣りとして有名な所になってきております。これが今現在、川を活用したまちづくりですね。

常総市は、市の中央部に鬼怒川と小貝川という大きな川が流れております。常総市は、かつては鬼怒川の水運で栄えた都市のひとつということで江戸時代から明治時代にかけて栄えました。今現在も、川と共に生きているという都市であります。水害の点で言いますと昭和６１年に小貝川が決壊しました。その時、私ども常総市の石下地区で堤防が決壊をして、そして常総市が大きな被害を受けたという事でそれ以降、国土交通省の皆様にご協力いただきまして小貝川の堤防の強化をしていただきました。現在、鬼怒川の方も堤防が低いところを高くしたりという事でこれも国土交通省さんにご協力いただいて水源から守るまちづくりという事をやっております。

最後に、１９６０年代の中ごろまでは鬼怒川は非常にきれいな川でして、そこで洗濯も出来ましたし、砂で川遊びも出来ました。ところが１９６０年代終盤以降、非常に水質が悪化し、また砂河原が消えてしまい非常にコンクリートの残念な川辺になってしまいました。これを何とか私どもとしましては砂河原を再現し、そして奇麗な水質に戻したいというのが今、私が考えている思いであります。何とかそう言う事を復活できるように力を入れていきたいと思っております。

今回の意見交換は、時間の関係もあり、全国川サミット開催自治体や、首長が出席された自治体のみのご発言となりました。

＜総括＞

国土交通省　水管理･国土保全局
河川環境課長　金尾 健司 氏

皆様方から大変貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。いくつか皆様方からお話をいただきました防災の面ですが、最近は全国各地で異常な豪雨が発生しております。地球温暖化の影響もこれから懸念されるところでして、東日本の大震災もそうですけれども我々が想定していた以上の外力に対しまして、しっかり備えていかなければならないと考えております。危機対策というハード面も重要ですけれどもソフト面の対策もこれからしっかりやっていかなければならないと皆様からのお話をお聞きしまして改めて思いました。

川づくり、地域づくりについて色々なお知恵を拝借いたしました。川の持つ価値は非常に多様であると思います。花火、アウトドア、舟運など皆様が様々な知恵をお持ちであると感じました。

それから、かわまちづくりという制度もあります。これからも皆様の活動を応援してまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

2）　１０月１４日（日）－第２日目－

第２１回全国川サミット in 取手
会　場：取手市民会館
参加者：１，３００人

① 開会行事

オープニング（Spark the ☆ Dancers　Kuga による踊り）

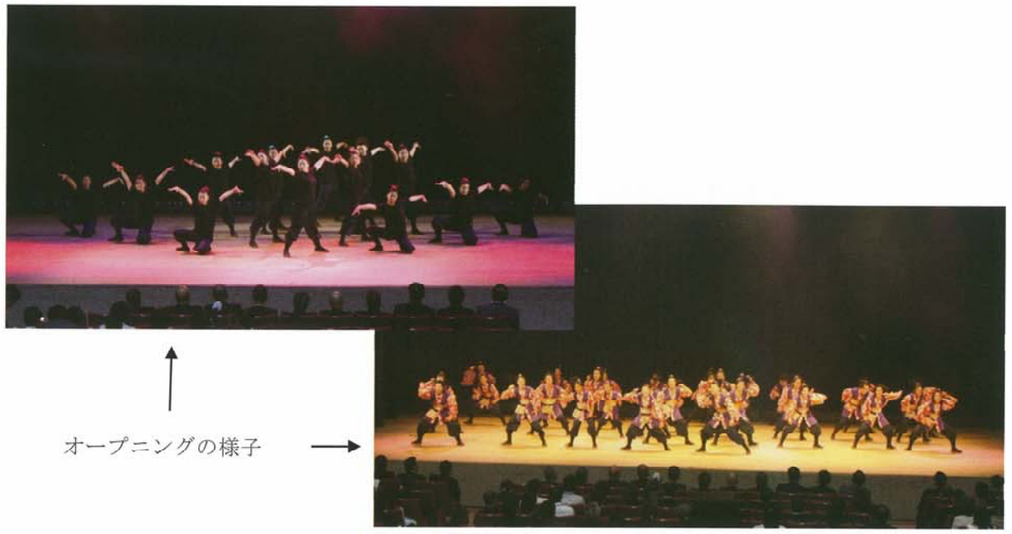
② 全国川サミット in 取手 開会式

○歓迎挨拶　取手市長 藤井 信吾
○来賓祝辞　国土交通省関東地方整備局河川部長 泊 宏 氏
茨城県土木部長 小野寺 誠一 氏

藤井取手市長

国土交通省関東地方整備局
河川部長　泊　宏　氏

茨城県土木部長
小野寺　誠一　氏



オープニングの様子

③ 参加自治体紹介

1　岩手県　二戸市　（にのへし）

天台寺法話

男神岩女神岩

（概要）
二戸市は岩手県内陸部の最北に位置し奥羽山脈と北上山地に挟まれており、一級河川馬淵川が南から北に向かって縦断し、支流の安比川が西から東に横断し市内で合流しています。市街地は馬淵川沿いの河岸段丘に形成しており、奥州街道（国道４号）の宿場町として発展してきました。馬淵川は青森県八戸市で太平洋に流れる河川であり岩手県の部分は上流域に当たります。カワシンジュガイが生息し、夏は鮎やカジカガエル、秋には鮭が遡上する自然豊かな環境が残っていて市民の宝となっています。東京から600Ｋｍの距離ですが、東北新幹線二戸駅があり東京まで３時間弱で結ばれています。また東北縦貫道八戸線、国道４号が通っており交通の要衝として発展してきています。

（川を活かしたまちづくり１）カワシンジュガイの保護
一級河川の馬淵川は二戸市の市街地を縦断しています。この川底には清流だけに生息するといわれているカワシンジュガイがいます。この生息域で河川の工事が行われようとしたとき、市民の中からカワシンジュガイを守り後世に残しておくべきであるという声が起き、工事場所を変更しました。この教訓をいかして平成12年に「二戸市宝を生かしたまちづくり条例」を制定することになりました。二戸市の宝を守り残す運動の象徴として、馬淵川のカワシンジュガイがあります。

（川を活かしたまちづくり２）自然豊かな清流馬淵川
二戸市の母なる川馬淵川にはカワシンジュガイがタナゴと共生しています。ヤマメ、カジカガエル、イワツバメ、カワセミ、カッコー、アオバズク、クロツグミなど多種多様な生き物がいます。この清流を利用して鮎の養殖・放流が行われており７月から多くの太公望が訪れます。

2　秋田県　横手市　（よこてし）

雄物川河川公園

横手のかまくら

（概要）
秋田県の南部に位置する横手市は、平成17年10月の市町村合併(8市町村が合併)により秋田県下第2位の都市となりました。新横手市誕生から6年が経過し、行事の共同開催や連携、公共施設の利用や各種行政サービスの便宜拡大と統一化などにより、市民の間には横手市としての一体感が確実に醸成されつつあります。横手盆地を貫流し、流域面積全国13位の「雄物川」の流域に発達した横手市は、水の恵みに彩られた町でもあります。代表的な冬の祭りかまくらは、水神様を祀ります。東北有数の豪雪は、春には豊富な雪解け水となって田畑を潤し、人々の生活を支えてきました。横手市は「豊かな自然・豊かな心・夢あふれる田園都市」を将来像に掲げ、生活基盤の整備に力を注ぐ一方、麹を中心とする発酵文化を守り育て、食に学び・食を楽しみ・食で潤う「食と農からのまちづくり」を進めています。当市で開催された第４回B-1グランプリでは「横手やきそば」がゴールドグランプリを受賞し、全国的にも注目を集めました。

（川を活かしたまちづくり１）横手川蛇の崎橋・蛇の崎川原
城下町横手市の市街地は、雄物川の支流である横手川を中心にまちが形作られました。17 世紀には横手川をはさんで武家の住まいである内町（うちまち）と町人の町屋が並ぶ外町（そとまち）が形成され、現在も当時のまち並みが多く残っています。蛇の崎橋と蛇の崎川原は市街地の中心にあり、市民の憩いの場として、夏の送り盆祭りやねむり流し、全国線香花火大会の会場として多くの人々を集めています。

（川を活かしたまちづくり２）雄物川河川公園
雄物川河川公園は、河川敷に整備された約 20ha の親水公園で、1 周 2.1km の舗装路ではインラインスケートやジョギング、また、せせらぎ水路では水遊びやカヌーを楽しむことができます。広大な芝生広場に水道やトイレ、遊具も整備されておりキャンプやバーベキュー・グラウンドゴルフ・砂遊びなど、幼児から高齢者まで多くの利用者でにぎわっています。

3　新潟県　長岡市　（ながおかし）

シティホールプラザ
「アオーレ長岡」

信濃川と長生橋

（概要）
長岡市は、日本一の大河・信濃川が市内中央をゆったりと流れ、市域は福島県境近くの守門岳から日本海まで広がる人口 28 万人のまちです。平成 17 年度に 9 市町村と、平成 21 年度に 1 町と合併し、長岡まつりや山古志の牛の角突き、寺泊の海の恵み、四季折々の自然など、個性ある 11 の地域の魅力が輝いています。平成 16 年の中越大震災をはじめとした相次ぐ災害にも、「米百俵」の精神を受け継ぐ市民の力で復興を成し遂げました。長岡市は、「前より前へ！長岡 人が育ち地域が輝く」を合言葉に、「市民力」「地域力」そして「市民協働」の力を活かし、シティホールプラザ「アオーレ長岡」、「子育ての駅」など全国にさきがけたまちづくりを進めています。

（川を活かしたまちづくり１）市民憩いの場 信濃川河川敷
信濃川の河川敷では、桜づつみのほか、堤防の緩傾斜化や遊歩道が整備され、春は桜のお花見スポット、夏は花火大会の会場として、また散策やジョギングのコースとして、子供からお年寄りまで多くの市民から親しまれています。

（川を活かしたまちづくり２）長岡まつり大花火大会
信濃川河川敷を会場として 8 月 2 日､3 日に開催する長岡まつり大花火大会は、2 日間で約 2 万発もの花火が打ち上げられ、「日本一の花火大会」として全国各地から約 90 万人もの人が訪れます。花火打上と観覧に恵まれた環境から、いくつもの名物花火が誕生し、今年は正三尺玉や震災復興祈願花火フェニックス、映画「この空の花」の公開を記念して生まれた花火などが打ち上げられ、観客の皆さんから大いに喜んでいただきました。

4　群馬県　みなかみ町　（みなかみまち）

ダム湖でのカヌー

谷川岳一ノ倉沢

（概要）
みなかみ町は、峻嶺谷川岳をはじめとする上越国境の山々に抱かれ、その雄大な自然から生命の水と豊富な温泉が滾々と湧き出づる「水と森を育む利根川源流の町」であり、首都圏の水瓶として利根川流域 3,000 万人の生命と暮らしを支える重要な責務を担っています。日本一流域面積の大きな川「坂東太郎（利根川）」と赤谷川の河岸段丘に沿って発展してきたみなかみ町。谷川岳の「一ノ倉沢・マチガ沢」に代表されるような国内第一級の山岳地や森林、風がそよぎ清らかな水が流れ蛍が舞う美しい田園、町内各地に湧き出る豊富な温泉などの大自然を地域の資源として活かしつつ、水源の地に住む私たち町民一人ひとりが「環境力」を身につけ、環境保全の責務を果たすことをめざして『みなかみ・水・「環境力」宣言』をしています。

（川を活かしたまちづくり１）日本リバーベンチャー選手権大会
清流から激流まで、あらゆる川をゴムボートで下るアウトドアスポーツ「ラフティング」。今や町の重要な観光資源の一つとなっていますが、そのラフティングが一般に知られる前から競技として行われ、昭和 52 年から今年で 36 回を数える歴史ある大会です。第 1 回大会では、僅か 5 チームの参加でしたが、現在では国内のラフティング大会の中でも最大規模の参加者数を誇るまでになっています。毎年 5 月に開催され、大会前には前夜祭も催され、地域住民との交流も図られています。

（川を活かしたまちづくり２）赤谷湖Ｅボート大会
今年 6 月に利根川の支流、赤谷川の源流である赤谷湖でＥボート大会が開催されました。Ｅボートとは、10 人乗りのゴムボートで、湖などの清流で楽しむほかに、水害時の救助にも有効なボートです。今年初めての開催でしたが、友好都市である取手市のチームもお招きし、町内外から 100 名を越える皆様にご参加いただきました。この大会をきっかけに、上下流域の交流をさらに深めることができるよう、来年も開催する予定です。

5　東京都　江戸川区　（えどがわく）

江戸川区全景

江戸川区花火大会

（概要）
江戸川区は東京都の東端部に位置し、西に荒川、東に江戸川など 7 つの一級河川と海に囲まれた水辺環境の豊かなまちです。全国の親水公園の先駆けとなった古川をはじめ、区内には総延長 27km の親水公園、親水緑道が流れ、潤いのある快適な都市空間を実現しています。その豊かな水辺を舞台に、第 11 回サミット（in 江戸川）、第 16 回サミット（in 荒川）を開催するなど、川とのふれあいや自然環境の保全・創出に努め、新たな都会の水辺環境を創出しています。一方、災害に強い江戸川区を目指し、区民の皆さんと協働でスーパー堤防整備などの治水対策にも積極的に取り組み、安全で安心なまちづくりを進めています。

（川を活かしたまちづくり１）放水路から川らしい水辺へ

荒川は首都東京を水害から守るために、昭和５年に開削された放水路ですが、今では多様な動植物が生息する自然豊かな水辺空間となっています。様々なスポーツや散策、自然環境に親しめる都市のなかの貴重なオープン・スペースとなっており、来年 9 月には国民体育大会のボート競技が開催されます。

（川を活かしたまちづくり２）スーパー堤防とまちづくり

江戸川区は、陸域の７割が満潮位以下の低地帯であるため、区民の皆さんと協働で、災害に強い安全・安心のまちづくりを進めています。荒川右岸の小松川地区では、密集市街地の解消を図る再開発事業とともに国土交通省のスーパー堤防事業が進められており、堤防上は２キロメートルにわたり千本の桜が咲き誇る名所となっています。

6　長野県　川上村　（かわかみむら）

高原野菜畑

千曲川（信濃川）の源流

（概要）

川上村は長野県の東端部に位置し、東に秩父連山、西に八ヶ岳を望み、山梨、群馬、埼玉の３県に境を接する。標高 1,100 メートルを超える高原の村で、日本一の長さを誇る千曲川（信濃川）はここから流れ出している。明治 30 年代にこの地を訪れた島崎藤村は「千曲川のスケッチ」の中で、「白米は唯病人に頂かせるほどの、貧しい、荒れた山奥の一つである」と記しているほどの、隔絶された貧しい地域であった。長い間の自給目的の主穀（雑穀）栽培農業に、昭和 11 年の小海線の開通が大きな変革をもたらし、出荷野菜として白菜の栽培が始まり、キャベツ、大根を組み合わせた農業を経て、昭和 20 年代半ばからレタスが試作導入された。その後、日本人の食生活の変化とともに、県営パイロット事業等の基盤整備事業に積極的に取り組み、現在では、生産量日本一のレタスをはじめとした高原野菜産地を築いている。

（川を活かしたまちづくり１）千曲川源流水の商品化

川上村は千曲川(信濃川)の源流に位置し、流れ出す水は、信州の名水・秘水 15 選に選定されていることから、源流域で湧き出る水を平成 24 年 7 月に天然水として商品化しました。商品名は、「上つ瀬の水」ペットボトルのラベルには、村出身の江戸時代後期の歌人、きの千風の歌を掲載しています。「千曲川　この上つ瀬は濁さじな　同じ流れをくむ　君がため」甘くまろやかな味わいとともに、源流域に暮らす私たちをはじめ、多くの人の心にこの歌を刻んでほしいと願っています。

（川を活かしたまちづくり２）甲武信源流サミット

名峰・甲武信ヶ岳は、その山懐に笛吹川（富士川）、荒川、千曲川（信濃川）の源流を擁しています。一滴の水がやがて大きな流れとなり、悠久の月日の中で国土を形成するとともに、流域の人々の暮らしを支えてきました。地形、地理的な条件が縁で、「甲武信ヶ岳を共有する山梨市、秩父市、川上村が力を合わせ、環境保全、有害鳥獣対策、限界集落問題、防災など共通する課題解決に向けた取組みを進める」ため、2007 年から毎年持ち回りでサミットを開催し、交流を深めてきました。そこから新しい発見や発想を得るとともに、新しい人との出会いの場ともなっているところです。

7　岐阜県　白川町　（しらかわちょう）

水戸野シダレザクラ

白川茶　手摘み

（概要）

とびっきりの清流と豊かな緑が自慢の白川町。近年、美しい自然を生かした観光・レクリエーションとして脚光を集めています。また、豊かな山林資源を生かした木材産業や山間に流れる清流が生み出す独自の気候風土を生かしたお茶の栽培が盛んです。白川町は名前のとおり川に恵まれた町であり、代表的な河川は白川・飛騨川・佐見川・黒川・赤川の 5 つです。また数多くの川にちなんだ行事やイベントが開催されます。8 月には夏休みを利用して親子で楽しみながら参加できる町内各河川の調査活動（カワゲラウォッチング）や 9 月には地域で共有できる貴重な財産である「飛騨川」にてＥボートにより体感し、川を学び、川と遊びながら飛騨川・木曽川を通じた地域連携を進め、交流を深めます。白川町は、総合計画で定めた「水源の里の恵みいっぱい　活力みなぎる人たちが暮らすまち」に掲げているとおりこの町が「水源の里」として、いつまでも自然が豊かで美しく、住む人が元気であったかいまちづくりを目指しています。

（川を活かしたまちづくり１）河川水質調査（ｶﾜｹﾞﾗｳｫｯﾁﾝｸﾞ）

白川町は、自然豊かな地域で名前のとおり川に恵まれた町です。大小の河川がたくさんあり、毎年水生生物による河川の水質調査として「カワゲラウォッチング」を行っています。この事業は小中学生をはじめとする住民の参加を得て、身近な河川にすむ生物を調べることにより河川の水質を調査をするものです。本町の大切な財産である河川をいつまでも美しく保つことの大切さや重要性を伝えています。その他にも地域の「川を守る会」の方による清掃活動など行われ環境美化の輪を広げています。

（川を活かしたまちづくり２）Ｅボート交流大会

白川町には大小の河川がたくさんありますがそのうち代表的な河川は白川、飛騨川、佐見川、黒川、赤川の 5 つです。その中の飛騨川では、9 月にＥボート交流会を開催します。この交流会では地域で共有する貴重な財産である「飛騨川」をＥボートにより体感し川を学び、川と遊びながら飛騨・木曽川・伊勢湾を通じた地域連携を進め、交流を深めています。

8　岐阜県　揖斐川町　（いびがわちょう）

徳山ダム

谷汲踊

（概要）

平成 17 年に 1 町 5 村が合併した揖斐川町は、岐阜県の最西部に位置し、北は福井県、西は滋賀県と接しています。南西部から北西部にかけて、標高 1,100～1,300m の越美山系がそびえ、南東部は濃尾平野の最北端に位置する平坦地で、市街地及び田園地帯となっています。その中央部を木曽三川のひとつである揖斐川が流れており、町の名称になっています。揖斐川町は「自然と歴史が育むふれあいと活力のある健康文化都市」という将来像を掲げて町づくりを推進しています。日本最大の総貯水量 6 億 6 千万トンを誇る徳山ダムは、治水の重要な役割を果たすとともに、日本一美しいといわれるダム湖が観光拠点として期待されています。また、水力発電による電力供給の新たな拠点として、現在工事が進められております。春には桜、秋には紅葉の名所として賑わう西国三十三番満願霊場「谷汲山華厳寺(たにぐみさんけごんじ)」の境内で奉納される谷汲踊（たにぐみおどり）は、鳳凰の羽をかたどった色鮮やかなシナイをくねらせ、太鼓を叩きながら踊る勇壮な踊りです。

（川を活かしたまちづくり１）いびがわマラソン
秋の揖斐川沿いを走る「いびがわマラソン」は 1988 年に始まり、今年で 25 回目を迎えます。アップダウンの多い厳しいコースですが、月刊ランナーズ「ランナーが選んだ全国ランニング大会 100 選」で、連続 15 年間にわたって上位に選ばれています。その魅力は、町じゅうをあげてランナーをお迎えし、ひとり一人の心に残るレースにしていただけるよう、運営や応援に力を入れるとともに、山々の緑に囲まれ、揖斐川の流れを目にしながら、沿道の声援を受けて走る心地よさが揖斐川マラソンの最大のポイントです。これからも全国のランナーに揖斐川町を訪れていただき、揖斐川の水の流れと山の緑を満喫していただきたいと思います。

（川を活かしたまちづくり２）いびがわの祭り ありがとう花火
古くから揖斐川町に伝わる「かっぱ伝説」と「水神まつり」をもとに、揖斐川の安全祈願と川の恵みに感謝して開催されるいびがわの祭り、花火大会が、揖斐川町前島橋上流の揖斐川河川敷で行われています。願い事や揖斐川への感謝の気持ちをメッセージシールにして花火に貼って打上げることから「ありがとう花火」と呼ばれています。県内でも数箇所でしか打ち上げできない尺玉花火が次々と上がり、地鳴りする爆音と、夜空に咲き続ける大輪の華が見る人を魅了します。今年も 4000 発の花火を町内外から訪れた約７万人の観客が楽しみました。

９　兵庫県　加古川市　（かこがわし）

加古川俯瞰

鶴林寺

（概要）
加古川市は、兵庫県下最大の一級河川「加古川」の恵みを受けて発展してきた都市です。江戸時代には山陽道の「加古川宿」として本陣・陣屋が設けられ、高瀬舟の往来でにぎわいました。現在、臨海部には国内有数の製鉄所があり、内陸部では建具・靴下などの地場産業が営まれています。ＪＲ加古川駅や東加古川駅周辺では都市機能の充実を図る一方、国宝鶴林寺など歴史ある神社仏閣や豊かな自然を保全しています。市ゆかりのプロ棋士５名が活躍していることから、平成 23 年に若手の登竜門となる日本将棋連盟公式戦「加古川青流戦」を創設するなど、だれもがいきいきと暮らす活気のあるまち、誇りや愛着を持ち、「いつまでも住み続けたいウエルネス都市加古川」の実現に向け躍進しています。

（川を活かしたまちづくり１）加古川まつり花火大会
今年で 41 回目を迎える花火大会は、「絆つながれ」をテーマに８月５日の日曜日に開催されました。加古川の河川敷には市内外から約６万５千人の観覧客が訪れ、5 千発の花火による光と音のファンタジーを楽しみました。また、加古川まつりの一環として市内 21 箇所でのイベントの外、加古川大堰上流部を会場とした第 19 回市民レガッタも開催され、156 クルー780 人がナックル艇による競技に参加しました。

（川を活かしたまちづくり２）加古川マラソン等
加古川河川敷の防災道路を利用した加古川マラソンは、毎年 12 月 23 日に開催され、今年で第 24 回目を迎えます。豊かな自然に囲まれたフラットなコースのため記録が出やすいことで有名で、全国からランナーが集まっています。昨年は参加者約 4,800 人の内、約３千人がフルマラソンに挑戦しました。また、11 月には加古川ツーデーマーチが行われます。加古川河川敷や水管橋などは目玉ポイントです。

１０　群馬県　昭和村　（しょうわむら）

河岸段丘

昭和の秋まつり

（概要）
昭和村は、群馬県の北部に位置する利根郡の南端にあり、赤城山の北西麓に扇状に広がる村です。首都圏からは関越自動車道練馬ＩＣより約 120 ㎞、約 80 分という大変アクセスしやすい場所に位置しています。また、全面積の 40%が農地という、大変農業が盛んな村であり、生産量日本一を誇る「こんにゃく芋」のほか、様々な野菜や果物などの農産物を栽培しておりその多くを首都圏に出荷していることから『やさい王国昭和村』として首都圏の台所を担っています。平成 21 年には日本百名山に位置づけられる、武尊山や谷川岳をはじめとする山々を一望できる「大パノラマや農村風景等」が評価され、「日本で最も美しい村」連合に加盟いたしました。

（川を活かしたまちづくり１）河岸段丘
昭和村の北西に流れる利根川と片品川が悠久の時をかけて大規模な河岸段丘をつくりだしており、それが自然の美しい景観をつくりだしています。平成 21 年にはその美しい景観を認められ、「日本で最も美しい村」連合に加盟いたしました。

（川を活かしたまちづくり２）昭和の秋まつり
秋の収穫期に河岸段丘の大地で生産された農産物や加工品を振る舞い、村内外住民相互の交流を促進するため、平成 10 年から毎年「昭和の秋まつり」を行っています。生産量日本一を誇るこんにゃく 300 キログラムを使用した五千人分のこんにゃく大鍋が目玉です。

１１　茨城県　古河市　（こがし）

古河桃まつり

古河提灯竿もみまつり

（概要）
古河市は、関東平野のほぼ中央、茨城県の最西端に位置する都市です。地形は、ほぼ全域にわたり平坦で、南側に利根川が流下し、西側には今年７月３日にラムサール条約に登録された渡良瀬遊水地があります。その治水容量は 17,180 万 ㎥、東京ドーム約 700 個に該当する総面積 33ｋ㎡、国内有数の湿地として貴重種植物の宝庫であり、周辺を含めた広大な空間は、スポーツやレクリエーションの場として親しまれています。また、宮戸川や西仁連川などの河川が田園地域を南流し、水と緑豊かな自然環境を有しています。また、首都圏から 60km 圏内に位置し、JR 宇都宮線をはじめ、国道４号、新４号国道や 125 号、354 号などの広域的道路が東西南北に走り、生活や生産、流通の場として恵まれた立地条件にあります。そして、県と緊密に連携しながら企業誘致の為の条件整備を図り、今年５月７日から古河名崎工業団地において日野自動車㈱古河工場の一部が稼働し、今後、工場の順次稼働に伴い様々な需要が発生し、地域経済活性化への波及効果が期待されます。

	（川を活かしたまちづくり１）古河花火大会 新古河市となり、今年で第７回目を迎える古河花火大会では、渡良瀬河畔に来場者数50万人を記録し、盛大に開催されました。また、広大な渡良瀬湖畔を利用したこの大会では、お馴染みとなりました三尺玉を関東で唯一３発打ち上げます。渡良瀬の夜空を彩る大輪の壮大なスケール感と鮮やかな色彩の祭典であります。
	（川を活かしたまちづくり２）利根川クリーン作戦 美しく安全で快適な河川を保つための事業として、ボランティアによる清掃活動を毎年11月に実施しています。年々企業からの参加者が増加しており、利根川の美しい景観の維持に貢献しています。

１２　茨城県　守谷市　（もりやし）

 鬼怒川と滝下橋 大木流作の牧草地帯	（概要） 守谷市は、利根川・鬼怒川・小貝川の一級河川に囲まれた水と緑に恵まれた大地です。つくばエクスプレスの開業に伴い秋葉原から最短32分、常磐自動車道もあり交通の利便性に恵まれ、都心から40ｋｍ圏内にあり、首都圏のベッドタウンとして年々人口が増加しております。また、2008年には東洋経済新報社の住みよさランキングで総合第１位になり、2012年には総合第５位と常に上位を確保しております。河川環境に負担のかからないよう公共下水道整備も早くから着手し、ほぼ100%の普及率を達成しています。市民憲章のとおり、水と緑に親しみ、自然を愛し、美しいまちづくりを市民と市が協働し行っております。
	（川を活かしたまちづくり１）鬼怒川と滝下橋 1629年～1630年（寛永６年～７年）にかけ、つくばみらい市寺畑で繋がっていた鬼怒川と小貝川を分離し、この周辺が掘削され利根川に小貝川が繋がりました。それに伴い、昭和31年の滝下橋の完成までは、板戸井地区が鬼怒川を挟んで東西に分断され、行き来に渡し舟が使われていました。当時の滝下の渡しには、茶屋などがあり、賑わいました。
	（川を活かしたまちづくり２）大木流作の牧草地帯 この地は河川に囲まれた低地であることから、洪水の被害に遭うことが多く、流作場と呼ばれており、現在も大木流作という地名が残っています。この地区は、酪農・肉用牛等の畜産業が盛んであり、県内でも有数の畜産業の地域です。畜産業を営むため必要な牧草は利根川と鬼怒川の広大な河川敷が活用され、463,616㎡の牧草地帯が形成されています。

１３　茨城県　常総市　（じょうそうし）

 吉野公園（へら鮒つり堀） 常総きぬ川花火大会	（概要） 鬼怒川が市の中央を流れ、小貝川を東の境界としている常総市は、水海道市と石下町が合併し、平成18年（2006年）に誕生しました。茨城県南西部にあり、今、話題の東京スカイツリーからは、わずか40ｋｍ圏内に位置しています。江戸時代の初めに整備された鬼怒川水運の発達とともに、「河岸町」として発展してきた常総市は、川の流れと共に生きてきた町です。廻船業を営んでいた五木総の三階建煉瓦蔵、大正時代の洋風建築の二水会館、重要文化財の坂野家住宅、千姫さまの菩提寺の弘経寺など、たくさんの文化財も残されています。常磐高速やつくばエクスプレスを利用して、都心からはわずか１時間で、常総市においで頂けます。
	（川を活かしたまちづくり１）常総きぬ川花火大会 常総の夏！と言えば「きぬ川花火大会」です。総打上数7,000発とコンパクトながらも、とあるＴＶ番組の「夏の人気花火大会ベスト15」では、堂々8位にランクインしました。日本でも指折りの花火師が創り上げる花火の、その芸術性の高さが人気の秘密です。花火大会の最後を飾るグランドフィナーレは、音楽と花火をコラボレートした「ミュージック スターマイン」です。夜空を彩る花火が、きっと、あなたの心も捉えることでしょう。毎年８月後半に、鬼怒川に架かる豊水橋周辺の河川敷を会場に行われます。
	（川を活かしたまちづくり２）吉野公園（へら鮒釣り堀） 小貝川の旧河道を利用した吉野公園は、全国でも珍しい市営のへら鮒釣り場です。水面積５万平方キロメートル、周囲４キロメートルという大きさを誇り、桜の名所としても知られています。自然いっぱいの雰囲気は、太公望のみならず、ご家族でお楽しみいただけます。※見学は無料で、木曜が休園となります。釣りをされる場合の釣料は、一日1,000円となっています。

１４　茨城県　つくばみらい市　（つくばみらいし）

 小張松下流網火 高岡流網火	（概要） 当市は茨城県の南西部、東京都心から40Ｋｍ圏に位置し、鬼怒川、小貝川の２大河川が流れています。小貝川沿いは、広大な水田地帯が広がり、丘陵部は、畑地、４つのゴルフ場、住宅地が形成され首都圏近郊都市に位置付けされています。道路網は、北部に国道354号線、西側に国道294号線、中央部を常磐自動車道が走り、国道294号線と交差し谷和原ＩＣがあり交通の利便がはかられています。さらに鉄道網では、国道294号線と平行に関東鉄道常総線が走り、小絹駅周辺には常総ニュータウン開発が行われ、平成２年から入居が始まり人口が大きく伸びました。平成17年８月24日には東京秋葉原とつくば市を結ぶ首都圏新都市高速鉄道「つくばエクスプレス」が開業し、みらい平駅から東京秋葉原まで最速で40分、つくばまでは12分で結ばれました。みらい平駅周辺では県主体の優良な住宅地開発が進みマンションやショッピングセンターなどが整備され、今後の新しいまちづくりが期待されているところです。また、首都圏内での唯一の時代劇オープンセットである「ワープステーション　江戸」は、フイルムコミッション事業の一環として地元支援団体のつくばみらい市エキストラの会を中心に地域の人々の参加により、大河ドラマ・映画・ＣＭなど数々のロケが行われています。

	（川を活かしたまちづくり１）福岡堰の桜 福岡堰は、岡堰、豊田堰とともに関東三大堰に数えられています。小貝川と福岡堰から流れる用水路の間には、およそ５５０本のソメイヨシノが１．８ｋｍにわたって延び、春には見事な景観を作り上げ、その美しさから付近一帯は、茨城観光１００選にも選定されています。
	（川を活かしたまちづくり２）取手常総自転車道線（小貝川サイクリングロード） 小貝川サイクリングロードは市内を流れる小貝川沿いの自転車専用道路です。沿川は比較的豊かな自然が残されていて、週末になるとサイクリングや散歩を楽しむ人々の憩いの場となっています。また、沿線には江戸時代に蝦夷地を測量したことで有名な間宮林蔵の生家や記念館があり彼の足跡をたどることができます。

１５　茨城県　牛久市　（うしくし）

 うしくかっぱ祭り 河童の碑	（概要） 牛久市は、茨城県の南部、都心から50km圏内に位置しており、JR常磐線に加え国道６号や圏央道をはじめとする広域交通ネットワークが充実しているとともに、茨城観光百景にも選ばれている牛久沼や多くの里山の自然が残る都市と自然の調和する住みやすいまちです。また、当市には、日本初の本格ワイナリーとして開業し、国の重要文化財にも指定されたシャトーカミヤやギネスブックに登録された世界最大 120 メートルの高さを誇る牛久大仏、そして多くの河童の絵を残し「河童の芋銭」と言われた画聖小川芋銭のアトリエ「雲魚亭」など、歴史や文化に触れることのできる魅力あふれるスポットが豊富にあります。
	（川を活かしたまちづくり１）根古屋川（ねこやがわ）緑地整備事業 根古屋川は牛久駅南側に位置する住宅街付近を流れ、住宅街の雨水の流末排水路となっています。この住宅街では、度々浸水被害が発生しており、それを解消させるため河川整備を進めています。整備にあたっては、人が気軽に水にふれあえるような河川や調整池を整備することにより、水辺空間を創出していきます。また、周辺には貴重な斜面林が残されているため、この自然を活かし、自然環境の保護・保全を行いながら、市民が集える広場や散策路等を含め、河川と一体となった整備を行っていきます。

１６　茨城県　龍ケ崎市　（りゅうがさきし）

 牛久沼と白鳥 撞舞	（概要） 龍ケ崎市は、茨城県の南部、東京から北東約 50 km、筑波研究学園都市と成田国際空港の中間に位置しています。北部は関東ロームの堆積する稲敷台地で、首都圏 50 km圏内という地理的条件から龍ケ崎ニュータウンやつくばの里工業団地などの開発による都市化が進み、南部は鬼怒川と小貝川に挟まれた沖積平野で、小貝川３大堰の一つである豊田堰からの用水による水田地帯が豊かに広がり、中央部には稲敷地方の米の集積地として農業と共に商業も栄え「商都」とたたえられた歴史を持つ古くからの龍ケ崎市街地があります。また、西部には昭和 38 年に皇居から譲り受けた白鳥が連綿と生育している牛久沼があり、自然豊かな環境が保たれています。
	（川を活かしたまちづくり１）小貝川市民運動公園 河川敷の空間を利用してスポーツやレクリエーションが楽しめる場として、また、市民の健康増進に役立ててもらおうと設置した運動公園です。この公園には野球場と多目的広場が設けてあり、面積は併せて 52,800 ㎡あるので、様々なイベントにご利用いただけます。また、毎年８月には防災関係機関の力を結集して行われる総合防災訓練「市民防災フェア」が行われています。消防車両による火災消火や自衛隊・防災ヘリコプターの出動など、会場では緊迫感あふれる訓練が次々と繰り広げられます。
	（川を活かしたまちづくり２）牛久沼水辺公園 西谷田川・東谷田川の下流部が小貝川土砂でせき止められて出来た牛久沼のほとりに整備された公園です。この公園には白鳥を間近で見ることができるふれあいスペースや、せせらぎ、多目的グランドを備えています。桜が植えてあるので、いずれはお花見の名所になるかもしれません。また、園内の水路には「牛久沼水辺公園を守る会」が牛久沼に自生していた古代ハスを自宅で育て移植したものがあり、７月頃に美しいピンクの花を咲かせています。

１７　茨城県　河内町　（かわちまち）

 直販センターふるさとかわち 田園風景（秋）	（概要） 河内町は、首都 50ｋｍ圏に位置し、世界の玄関口成田国際空港のある成田市に隣接、町の南は坂東太郎の名で有名な利根川が、北部を新利根川が東西に貫流し、北に紫峰筑波山を望む平坦な地形で、茨城県南端中央部の地域一面肥沃な水田が広がる、水と緑あふれる自然豊かな町です。河内町の基幹産業は農業です。農家の活性化、所得向上のため、第３セクター「株式会社ふるさとかわち」を設立し、国道 408 号線沿いの「直販センターふるさとかわち」ではブランド米「おかずのいらないかわちのお米」、茨城県産地品種銘柄米「とねのめぐみ」や「町特産品」を各種販売、PR をしています。また、歌集「薔薇祭」等で戦後短歌に新風を吹き込んだことで著名な「大野誠夫」出生の地としても知られています。是非、自然豊かな「太陽と水と緑の町～かわち」へ、足をお運びください。

（川を活かしたまちづくり１）農業用水としての利用

河内町は南に利根川、北に新利根川が貫流する水に恵まれた肥沃な大地を活用し、古くから純農村地帯として発展してきました。町の歴史は川との付き合いなくしては語れなく、昭和 40 年からは農業構造改善事業が開始され、昭和 46 年からは用水のパイプライン化が進み、水管理の合理化、乾田化等々、理想的な農業基盤が構築されました。現在でも、両河川の水を利用し、自然豊かな大地に悠々と水を張った水田に汗を流し農業を営んでいる町民の姿が印象的であります。こうして収穫されたお米が「おかずのいらないかわちのお米」としてブランド米化されています。

（川を活かしたまちづくり２）利根川を望むｻｲｸﾘﾝｸﾞﾛｰﾄﾞ．ｸﾞﾗｳﾝﾄﾞ

利根川の河川堤防には、サイクリングロードが整備され、土曜日・日曜日・祝日等は町民等が川を望みながらサイクリングやウォーキングを楽しんでいます。また、同河川敷に整備されたグラウンドでは、併設されたつつみ会館等の利用者が川を望みながらのイベントを催したり、町民のスポーツ・レクリエーション活動を通した交流の場として親しまれています。

１８　茨城県　稲敷市　（いなしきし）

田園風景

稲しきのあげ餅

（概要）

稲敷市は、茨城県の南端部、首都東京から約 60ｋｍ圏に位置し、稲敷台地と霞ヶ浦、利根川、新利根川、小野川などの豊かな水辺環境や温暖な気候にも恵まれ、広大な田園風景が広がる県内有数の穀倉地帯として知られています。そんな豊かな風土に育まれた美味しいお米を使って作られる「稲しきのあげ餅」は、古くからお茶菓子や子どものおやつとして食され、今も人々が集まるところで会話や笑い声とともに地域の食文化として根付いています。北側には国際的な研究学園都市「つくば」、南側には世界への玄関口である「成田」を擁する位置関係にあることから、近年ではこれらの広域核都市と圏央道で結ばれることにより、首都圏域の流通拠点としても期待が高まっており、「産業」「文化」「自然」が調和する「みんなが住みたい素敵なまち」づくりを推進しています。

（川を活かしたまちづくり１）いなしき夏まつり花火大会

「いなしき夏まつり」（合併前までは、えどさき夏まつり）は平成 8 年からスタートしたお祭りで、今年も第 16 回大会を 8 月 25 日に開催し、10 万人を超える人たちで賑わいました。茨城県内の花火大会の中でも最大級の打ち上げ数を誇り、小野川沿いから打ち上げられる約 12,000 発の花火が稲敷の夜空に大輪の花を咲かせます。なかでもフィナーレを飾る「これぞ！日本一のスターマイン」は約 10 分間にわたり連続で打ち上げられる絢爛さは、まさに圧巻です。

（川を活かしたまちづくり２）稲敷市ふな釣り大会

稲敷市ふな釣り大会は旧東村時代から続くイベントで、今年で 43 回目を迎えます。稲敷の釣りスポットでもある横利根川～新利根川を中心に、稲敷市全水域で開催される当大会は、市内外から多数の太公望たちが集い腕を競い合います。なかでも横利根川は、古くから関東随一のふな釣りのメッカとして知られ、腕に覚えのある全国の釣りファンたちが集うスポットとして人気を集めています。

１９　茨城県　潮来市　（いたこし）

前川あやめ園

嫁入り舟

（概要）

潮来市は、茨城県東南部に位置し、北部には行方大地が南北に続いており、東部には北浦に面し、西部は霞ヶ浦と北利根川、南部は外浪逆浦というように、水辺に囲まれた自然豊かなまちです。古くから水運陸路の要所として栄え、大化の改新のころ国府から鹿島神宮へ通じる駅路「板来の駅」を設けたのがまちの始まりだと伝えられています。5 月・6 月には水郷潮来あやめまつりが開催され、約 500 種 100 万株のあやめが咲き誇り、水郷潮来の風情を美しく彩ります。期間中には「潮来花嫁さんは舟で行く…」の歌で親しまれる嫁入り舟が運航されております。白無垢を着た花嫁が、花婿の待つ岸まで櫓舟（ろぶね）で嫁ぐ姿は、多くの観光客の心を魅了しています。

（川を活かしたまちづくり１）嫁入り舟

開発事業が行われる昭和 30 年前半までは、水路によって形成された生活形態であったことから、嫁入りする際の花嫁や嫁入り道具等を運搬するときにもサッパ舟が使われており、これが「嫁入り舟」のはじまりだとされています。今では、「潮来花嫁さんは舟で行く･･･」の歌で全国的に親しまれ、5 月～6 月に行われるあやめまつりでは、多くの観光客からの祝福を受け、実際に嫁入り舟が運航されております。

（川を活かしたまちづくり２）水郷潮来シティレガッタ

潮来市では、利根川を利用したスポーツとしてレガッタが盛んです。水郷潮来シティレガッタは、昭和 49 年に開催された茨城国体にあわせ、ボート競技の普及を目指し、「水郷潮来レガッタ」大会として開催されたのが始まりとされています。毎年 6 月末のあやめまつり期間中に開催され、全国各地から強豪選手が集まり、目を見張るレースが展開されます。また、初心者でも漕げる種目もあり、子供から大人まで多くの市民が参加し、ボート競技の普及・発展の場となっています。

２０　千葉県　我孫子市　（あびこし）

高野山桃山公園

手賀沼と白鳥

（概要）

我孫子市は、南北へ約 4 キロ、東西へ約 14 キロと東西に長く、南は手賀沼、北は利根川と水辺に囲まれ緑あふれる自然豊かな街です。そのような豊かな自然に囲まれた水辺には多くの野鳥が生息し、渡り鳥の越冬の地ともなっており、首都圏屈指のバードウォッチングの名所となっています。南北の中心には背骨のように東西に高台が続いており、高台から手賀沼を見渡す景色は「北の鎌倉」と称されました。そのような土地柄は白樺派の文人達を始め多くの著名人に愛されました。現在は、交通の利便性から都心へ通勤する人の住宅地となっていますが、ボランティアや市民活動に参加する住民も多く、たくさんの人が地域の活動やイベントに参加する街でもあります。

	（川を活かしたまちづくり１）レンゲまつり 利根川の河川敷の公園である「利根川ゆうゆう公園」に我孫子ロータリークラブと我孫子市が協力してレンゲ畑に種を蒔き、この花畑でレンゲまつりが開催されます。凧あげ教室も開催され、青空の下に色とりどりの手づくりの凧が舞います。またはちみつ採取体験もあり、訪れた人たちは搾りたてのハチミツをパンにつけて食べたりします。その他にも竹トンボ作りがあったり、豚汁が無料で振る舞われます。毎年、親子連れなどでにぎわっています。
	（川を活かしたまちづくり２）冬鳥観察 利根川下流域を中心に、沿川の交流・連携による地域活性化を図る「利根川舟運・地域づくり協議会」と共に、手賀沼の冬鳥観察ツアーを開催しています。「我孫子野鳥の会」の皆さんの協力のもと、手賀沼およびそこに暮らす鳥類などを陸地側・沼側からウォーキングと船で観察してもらい手賀沼の良さをアピールするイベントです。

２１　千葉県　栄町　（さかえまち）

 房総のむら　ふるさとまつり ドラゴンカヌーで花見	（概要） 栄町は、千葉県の北部に位置し、北は利根川、南は印旛沼に囲まれ、東は成田市と隣接し、古墳群が点在する北総台地が連なります。北総台地には、「龍角寺」や体験博物館の「県立房総のむら」があり、豊かな自然と太古の遺跡や伝統が息づくまちです。東京都心より約45ｋｍ圏に入り、ＪＲ成田線で上野まで66分と都内の通勤圏として発展してきました。また、成田国際空港へは約10ｋｍのところに位置していることから、交通アクセスや食住が快適なまちを目指しています。
	（川を活かしたまちづくり１）SAKAEﾘﾊﾞｰｻｲﾄﾞ・ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ 「利根川をはじめとした河川を親しみ、河川や水辺を活用し、賑わいを創造する」をテーマとし、震災からの復興への願いを込めて「さかえを元気に」をコンセプトに、昨年に引き続き今年も、8月18日の土曜日に開催されました。当日は、町内外から28,000人のかたが来場し賑わいました。また、フェスティバルの最後を飾るのは、7年ぶりの約1,300発の打ち上げ花火。中でも間近で見る大玉花火が打ち上げられ、響く音で会場から歓声と拍手が湧き起こり、夏の夜を満喫していました。
	（川を活かしたまちづくり２）利根川での水遊び 豊かな水に囲まれた栄町では１年を通して水に関するレジャーが盛んです。中でも季節を問わず人気なのが釣りです。特に利根川と長門川の合流地点周辺は格好の釣り場として知られています。また、ジェットスキーやカヌーなども人気のスポットです。

２２　千葉県　神崎町　（こうざきまち）

 なんじゃもんじゃ 利根川	（概要） 神崎町は利根川右岸、下総台地の北端中央部に位置し、東に香取市、西に成田市と接しており、利根川を挟んで茨城県稲敷市と県境を成しています。江戸時代には利根川水運の河港として栄え、当時から300年以上続く酒造りは、良質な米の産地であることや地下水が醸造に適した水質であることから、県下でもトップクラスの生産量を誇り、伝統を今に伝える酒造りが多くの日本酒ファンの喉を潤しています。東京から距離は約60ｋｍ、面積は19.85ｋ㎡、町の東西5.7ｋｍ、南北6.2ｋｍ、地勢は概ね平坦で、南東部は丘陵の起伏が多く、畑や山林が大半を占め、北部は利根川沿いに肥沃な沖積低地が開けています。現在、圏央道のインターチェンジが建設中であり、利根川の景観を活かしたインターチェンジ周辺整備を計画しており、道の駅を中心とした町おこしを目指しています。
	（川を活かしたまちづくり１）神崎河川敷祭 神崎大橋下流に広がる「こうざき河川敷広場」に植栽された約40ａのコスモス畑とともに水辺の自然を親しんでもらうことを目的に平成20年度より毎年10月に開催しています。平成22年度からは「こうざき船着場」を利用し、秋空の下、爽快感あるプレジャーボートや忙しい時間を忘れるサッパ舟の体験乗船を開催しています。また、その隣では、「神崎寺」による「火渡り修行」が行われ、燃え盛る炎の中を山伏姿の僧が通り抜け、また見物客も家内完全や無病息災を祈願して渡り歩いています。
	（川を活かしたまちづくり２）発酵の里こうざき酒蔵まつり 神崎町は古くから、米作に適した肥沃な土と良質な水、利根川の水運に恵まれ、酒・味噌・醤油などの発酵食品が盛んに作られてきました。酒蔵まつりは３月中旬に300年以上も続く２軒の蔵元を中心に周辺街道を会場としたイベントです。街道の先にあたる利根川ではセカンドステージとして盛りだくさんの催しものがあり、多くの来場者により賑わいます。

２３　千葉県　香取市　（かとりし）

 歴史的町並みと小野川 水郷おみがわ花火大会	（概要） 香取市は、千葉県の北東部に位置し、北部は茨城県と接しています。東京から70㎞圏にあり、世界への玄関、成田空港から15㎞圏に位置しています。北部には水郷の風情が漂う利根川が東西に流れ、その流域には水田地帯が広がり、南部は山林と畑を中心とした平坦地で北総台地の一角を占めています。日本の原風景を感じさせる田園・里山や、水郷筑波国定公園に位置する利根川周辺の自然環境をはじめ、東国三社の一つ「香取神宮」、江戸時代から昭和初期に建てられた商家や土蔵が現在もその姿を残し、関東地方で初めて「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されるなど、水と緑に囲まれ、自然・歴史・文化に彩られたまちです。

	（川を活かしたまちづくり１）水の郷さわら 平成22年、全国初となる「道の駅」と「川の駅」を併設した広域交流拠点施設「水の郷さわら」が国道356号沿いの利根川を望む高台にオープンしました。道の駅では、県内でも有数の農業地域である香取市で生産された新鮮な野菜や果物など様々な地域の特産品を販売。また、川の駅では、雄大な利根川を利用した観光遊覧船やプレジャーボートといった水と触れ合う体験型レジャー施設として楽しめるほか、災害時には防災拠点施設として機能できるように整備されています。
	（川を活かしたまちづくり２）香取市民レガッタ 「香取市民レガッタ」は黒部川の親水利用として、だれもが水に親しめるイベントとして、また夏のスポーツイベントとして定着してきたボート大会で、今年で通算23回を迎えました。現在は市内の方だけでなく県内外からの参加も多く、今年は89クルーの申し込みがありました。黒部川では市民レガッタだけでなく、その他にも小中高校生のカヌーなど水上スポーツが盛んで、平成22年には千葉国体ボート競技の会場にもなりました。また全国でも強豪の小見川高校ボート部の練習もここで行われています。

２４　千葉県　銚子市　（ちょうしし）

 上空から見た銚子市 犬吠埼灯台	（概要） 銚子は、徳川家康が手がけた「江戸～銚子間」の利根水運の開通により、東北方面の物資を運ぶ東回り海運の中継港になったことから、「ヒト」「モノ」で賑わう関東の一大産業都市として栄えました。また、利根川河口から屏風ケ浦に至る海岸線の美しい風景を目指して、当時から多くの文人墨客が訪れており、その足跡は多くの文学碑に刻まれています。このように、豊かな自然に恵まれ、長い歴史と伝統文化に育まれてきた銚子市は、漁業、農業、食品加工業、観光業などがバランス良く発展し、多くの地域資源に恵まれており、また沖を流れる海流の影響で、夏は涼しく冬は暖かい気候の住みやすいまちです。
	（川を活かしたまちづくり１）銚子船着場 利根川の川岸の、以前は千葉県と茨城県を結ぶ連絡船の発着場だった場所に、平成22年に船着場が整備されました。利根川を周遊する遊覧船の発着等に利用されています。
	（川を活かしたまちづくり２）河岸公園 川にかかる橋としては日本一長い銚子大橋の近くに平成22年に河岸公園が造られました。流域面積日本一である利根川の河口の雄大な風景が楽しめるスポットで、夕日の眺めは格別です。銚子駅にも近く、市民や観光客の憩いのスペースになっています。

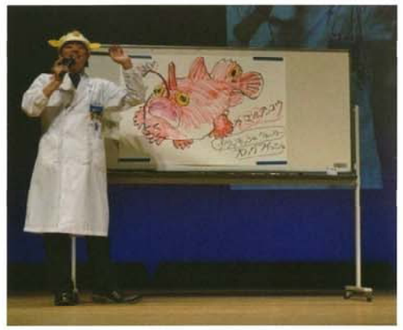
２５　茨城県　取手市　（とりでし）

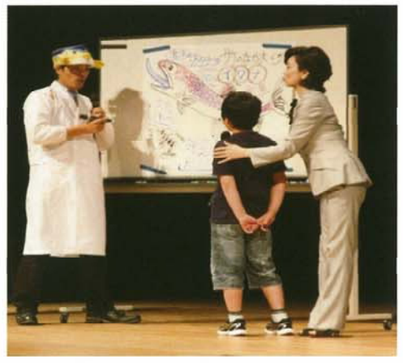
 小堀の渡し とりで利根川大花火	（概要） 取手市は、茨城県の南端部に位置し、南を「坂東太郎」と呼ばれ親しまれた一級河川「利根川」、北から東をその支流の「小貝川」が流れ、江戸時代には高瀬舟が行きかい、江戸への舟運の要衝として栄えました。また、水戸街道の宿場町として、人・物資・文化の交流で賑わいを見せていました。首都圏から約40㎞、時間にして約40分という交通の利便性に恵まれた位置にあることから、昭和40年代からの高度経済成長期には、大規模住宅開発により人口が増加し、首都圏のベッドタウンとして発展してきました。常磐線快速や地下鉄千代田線が取手駅まで乗り入れ、茨城県の南の玄関口となるなど首都圏近郊でありながら、豊かな水と自然に触れ合える都市となっています。
	（川を活かしたまちづくり１）小堀（おおほり）の渡し 明治末期の利根川大改修工事の結果、千葉県側になってしまった小堀地区の住民たちが大正３年から自分たちの手で渡しを始めました。昭和42年から市営になり、今では一日７便、常時運行している渡し船です。また、かつては小堀住民の足として運行していた渡しは現在、観光客やサイクリングを行う人の利用が多くなっています。近年、新設の桟橋ができたことから、３点間を結ぶ渡しとして、１運行経路100円で誰でも乗船できます。
	（川を活かしたまちづくり２）とりで利根川大花火等 昭和５年、国道６号利根川大橋の開通を記念して始まった伝統の花火大会。雄大な利根川の夜空を彩る七色の光と音の祭典です。毎年、利根川の広い河川敷には、市内外から10万人の見物客が訪れ、利根川に映える花火の美しさに見とれます。今年も59回大会を８月11日の土曜日に開催しました。その他、河川空間を利用した河川まつり（10月）やどんどまつり（１月）、小貝川の河川空間ではフラワーカナル（５月）なども開催されます。

④　記念講演　第２１回全国川サミットｉｎ取手開催記念講演
取手大利根ライオンズクラブ結成３５周年記念講演

講師　さかなクン
演題　「さかなクンのギョギョッとお魚の話」

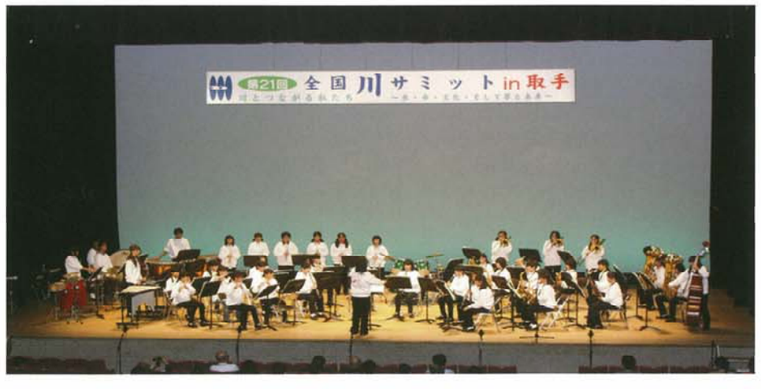
さかなに関する豊富な知識のある「さかなクン」による講演が行われました。





⑤　アトラクション

取手市立取手第一中学校による吹奏楽



⑥　児童生徒研究発表

取手市立取手第二中学校

＜紹介＞
利根川・小貝川には、多くの昆虫たちが生息しています。特に、蝶にとって、この河川敷は、繁殖に適し、様々な種類の蝶が生息しています。そこで、河川敷、森林地帯の蝶と、藤代大曲地域のジャコウアゲハの生態を調査して、その結果をもとに、河川敷の自然環境を守るといった視点だけではなく、これからの河川敷の自然環境と、どうかかわっていいのかを考える機会となるように、「利根川および小貝川河川敷に生息するチョウ」と題して研究内容を発表しました。

取手市立白山小学校

＜紹介＞

白山小学校は、利根川より徒歩十分の場所に位置し、年間を通して様々な学校行事を河川敷で行っています。

総合的な学習の時間には「川と遊び、川に学ぶ、私たちのふるさと」というテーマで、利根川や小貝川の歴史を調べ、川とのかかわりについて学んできました。

それらの活動を通して綴られてきた児童の詩をもとに作り上げられた白山小オリジナルの合唱組曲「利根川の詩　～川とつながるわたしたち～」を発表しました。

⑦　サミット宣言・サミット旗受渡式・次期開催地あいさつ

取手市立取手第二中学校の生徒が「第２１回全国川サミット in 取手　共同宣言」を読み上げ、参加自治体及び利根川・小貝川流域自治体の代表者とともに川の恵みを後世に引き継ぐことを宣言しました。

続いて、会長から、次期開催地の長野県川上村長にサミット旗が手渡されました。

共同宣言を力強く読み上げる取手市立取手第二中学校の生徒

次期開催地の長野県川上村長に
サミット旗を引継ぎました。

川上村長あいさつ

第２１回全国川サミット in 取手

共同宣言

利根川は群馬県みなかみ町の大水上山に発し、いくつもの支川を合わせ、千葉県野田市で江戸川を分派し、大河になって銚子沖の太平洋に注ぎます。古くから「坂東太郎」と呼ばれ親しまれ、その幹川流路延長は日本第２位、流域面積は日本最大の川です。

「第２１回全国川サミットｉｎ取手」は大河利根川と小貝川の合流する取手市を会場に、「川とつながる私たち　～水・命・文化・そして夢と未来～」をテーマに開催しました。

古来より多彩な歴史や文化を育み、さまざまな生物が生息する貴重な空間を提供し、豊かな水と緑によって市民にうるおいとやすらぎをもたらしてきた恩恵を再認識し、自然環境の保全と地域づくりに取り組んでいくことを誓い、ここに宣言します。

○　わたしたちは、みんなが安心して生活できる防災のまちづくり、川づくりに努めます。

○　わたしたちは、未来を担う子どもたちが、様々な活動を通して、人間のいのちの源となる水を育む地域であることを学びます。

○　わたしたちは、流域行政と地域住民が互いに力を合わせ、川がもたらした歴史や文化を大切にする地域づくりに取り組みます。

○　わたしたちは、多くの生物が生息する自然豊かな川づくりと、みんながうるおいと安らぎを感じる環境づくりに取り組みます。

○　わたしたちは、川とともに生きる自治体どうしのつながりを深め、川と育む未来を目指し、活動の場を広げます。

平成２４年１０月１４日

第２１回全国川サミット in 取手参加者一同

⑧　展示等

取手市民会館ロビーにおいて、参加自治体紹介のパネル及びパンフレット等の展示コーナーを設置しました。また、国土交通省関東地方整備局下館河川事務所の展示パネル、取手大利根ライオンズクラブの鮭の稚魚放流事業の展示パネル、取手市立取手第二中学校の蝶の標本の展示コーナーを設置しました。

市民会館入口前の特設テントでは、参加自治体の交流物産展及び竹細工教室（下館河川事務所主催）が行われました。

← 参加自治体紹介パネル展
パンフレット等展示コーナー

物産展及び竹細工ブース
（参加自治体の物産販売
及び竹細工教室）

→

Ⅲ　第２１回全国川サミット in 取手を振り返って

今回の全国川サミットでは、「川とつながる私たち　～水・命・文化・そして夢と未来～」のテーマのもと、全国の自治体からの参加者と市民が、川と地域の関わりや川との共生について考え交流を深めること、取手市内を流れる利根川・小貝川の恩恵を再認識し、流域市町村との連携を深めることを目的にさまざまな催しが行われました。

１日目の１０月１３日には、グリーンパレスふじしろ「鳳凰の間」を会場に、参加自治体の代表者が出席し、全国川サミット連絡協議会総会が開催されました。報告事項及び協議事項について審議され、すべて満場一致で承認されました。今後の全国川サミット開催予定については、平成２５年度の第２２回全国川サミットの長野県川上村開催が確認され、さらに第２３回全国川サミットを千葉県香取市で開催することが承認されました。

首長サミットでは、参加自治体の代表者から、「川を活かしたまちづくり」などについて意見交換が行われました。

２日目の１０月１４日は、会場を取手市立市民会館に移し、さかなクンを講師としまして、取手大利根ライオンズクラブとの共催により「さかなクンのギョギョッとお魚の話」と題し、記念講演が行われ、子供たちが熱心に聞き入っていました。

さらに、児童生徒研究発表では、未来を担う取手市立取手第二中学校と取手市立白山小学校が発表を行いました。取手市立取手第二中学校は、利根川・小貝川の河川敷、森林地帯の蝶と、藤代大曲地域のジャコウアゲハの生態について調査内容を発表しました。取手市立白山小学校は「利根川の詩　～川とつながるわたしたち～」と題したオリジナルの合唱組曲を４年生から６年生の児童が発表しました。

サミット式典では、取手市立取手第二中学校の生徒が「第２１回全国川サミット in 取手共同宣言」を読み上げ、参加自治体及び利根川・小貝川流域自治体の代表者とともに川の恵みを後世に引き継ぐことを宣言しました。続いて、次期開催地の長野県川上村長にサミット旗が手渡され、力強い次期開催地挨拶をいただきました。

私たち第２１回全国川サミットｉｎ取手参加自治体は、今サミットにおいて採択した共同宣言の実現のため、自治体どうしのつながりを深め、川と育む未来を目指し、活動してまいります。